慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 天理大学附属天理図書館蔵『老子道徳經河上公解〔抄〕』翻印並に解題(上) |
| Sub Title | |
| Author | 山城, 喜憲(Yamashiro, Yoshiharu) |
| Publisher | 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 |
| Publication year | 1994 |
| Jtitle | 斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.29 (1994. ) ,p.349- 437 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 資料紹介 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000029-0349 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料紹介

# 天理大学附属天理図書館蔵『老子道徳經河上公解〔抄〕』翻印並に解題（上）

山城喜憲

## 前言

本稿を公表するに当たり、先ず、本書の翻印並びに本誌掲載を快く御許可下さった、天理図書館の御配慮に対して深謝申し上げる。尚、同館目録による本資料名は「道徳經抄」、平成六年二月八日付けで許可指定された翻刻番号は、「天理図書館本翻刻第七一二号」である。

本書に初めて接したのは、平成元年三月の初めのことである。斯道文庫事業計画の主要案件「漢籍総目録編纂のための書誌調査並びに研究」の部門別テーマとして継続中であった「老子諸本の書誌調査」の進行上、天理図書館への訪書行が懸案となっていた。三月とはいえ、未だ残冬の余冷の身に沁みる、数日間の逗留だったと記憶する。同図書館の蔵書目録及び『国書総目録』に基づいて、事前に作成した所蔵道家類の図書名リストにはこの書は無く、当日、備付けのカード目録を検索して閲覧申請した貴重書の一つで、予期せぬ眼福を得て嬉しい成果であった。

一見して、河上公章句本を底本とした邦人撰述の注釈書で、江戸時代中期には下らない古写本であることは察知出来たが、「義曰」「疏曰」の引用が頻出する注釈内容については類書を聞

かず、調査カードを取るのに焦慮したことも記憶に新しい。取り敢えずは全巻の複写を申請して、後日の検討を期すこととした。

本書の資料としての性格内容についての詳細は後の解題にゆずり、ここではその概略を記しておきたい。

本書は、老子道徳経の経文及び河上公注文の全文を、経文の字句段節に従い分割掲出し（但し、同本は、後半の徳経部分を欠いている）、その経注文に就いて注釈を施した邦人の撰述書で、江戸時代初期の成立図書と推定される。全文掲出された経注文は、王朝以来近世初にわたって主流であった古鈔本、古活字版の本文に極めて近い、と言うより寧ろ同一本と見做してよく、老子テキストの伝流と遷移を考察する上でも、看過できない重要資料と認められる。また、江戸時代初期の老子学の水準と動向に就いては、窺測しうる伝存図書資料は非常に乏しく、本書の存在はそれを端的具体的に示す一事象として注目を要しよう。

更に、古書の引照が豊富であり、且つ引用に際しての字句の省略は殆ど無い。従って、引用諸書の流伝の情況或いは伝本系統を推察検討する上で、参考すべき点が極めて多いと信じる。その中には当時本邦未刊の書が多く、江戸前期以後明版の翻刻覆刻が盛んに行われるが、それ以前に於ける明版受容の一斑を伺うことも可能であろう。因みに「義曰」「疏曰」の標識は、唐の杜光庭撰「道徳経廣聖義」からの引用を示すもので、同書は本邦においては未だ刊行されたことが無く、舶載されたはずの宋元版、或いは明版の伝存本も未だ知られていない。且つ、本書引載本は現在通行の道蔵本とはテキストを異にしている。

以上の認識を得たことが、学界未紹介の写本であることとともに、此処に敢えて翻印公表する所以である。

送付されてきた写真をもとに、漸漸と翻字の作業を試み、昨夏ようように素稿を成し、此の三月再度天理へ赴き原本との対校を終えた。錯誤、尚、少なからずと恐れている。大方の教示叱正を切望する次第である。

閲覧、調査、複写等諸般にわたって、種々に御高配便宜を賜った金子和正先生をはじめ、天理図書館の関係者各位に対しては、重ね重ね深謝申し上げる。

平成六年仲夏識す。

# 凡例

一、本翻印の底本は、天理大学附属天理図書館所蔵の左記の古鈔本である。

老子道徳経河上公解〔抄〕（存道経三十七章並附）　旧題漢河上公章句　闕名者注　寛永四（一六一八）写

和大合二冊（請求番号一二六・一ーイ九）

（尚、所蔵者のカード目録の標目は「道徳経抄」）

一、書誌事項の詳細は解題で述べるが、繙読に必要と思われる梗概のみを記しておく。

後補茶色空押し卍繋ぎ花卉文表紙（二七・二×二〇・〇糎）、元表紙は本文共紙。もと六冊を二冊に合綴、第二、三、五、六冊の元表紙は欠落。両冊共に首に副葉紙一葉有り。

無辺無界、字面高さ約二二・三糎、毎半葉十三乃至十七行、章題及び経文は大字を以て掲出、注文は低一格、毎行廿三字内外不等。「僕按」等の按語は二格下げの箇所もあり、また、小字注、小字双行注も混在する。柱題署無し。

墨筆の返り点、送り仮名、音訓合符連続符を付す。朱筆の句点、圏点、合点及び朱引が施され、経文頭には「○」河上公章句の一部に「△」の朱標識を冠し、章句全文、或いは注解に引用された経文章句の字句の左旁には朱の傍線が附されている。

一、底本の忠実なる復元を期し、本文の譌字・脱字・衍文はもとより、訓点・振仮名の誤りと雖も、底本通りそのままに翻字し、「校記」にその旨注記して、私意に懸かる訂正は原則として加えていない。

一、本書の行間・眉上等余白には補訂の加筆が所々に存する。底本の加筆、削除の箇所は其の訂正するところに従い、「校記」に於いて、原状を注記した。

一、＊符を付した字句は、「校記」に注記のある字句であることを示す。

一、朱の句点・合点の加筆は、本文書写後程なく、書写者若しくはその近縁者が加点したものとみて支障無いであろう。従って、当時の句読法を伝えるものとして無視できない。依って読解の便宜をも考慮し、底本の加朱のままに、句点・合点を施した。章句左旁の傍線、経文章句頭の○△の符標も同様に扱う。

一、行字数は、底本の通りではないが、段落改行、空行の箇所は可能な限りそれに従った。改頁の箇所には私に「『」符を付し、下方欄外に底本の丁次数を示した。

一、◇は、虫損箇所を示す。

一、▩は、底本塗抹抹消の箇所である。抹消前の字句が判読出来る場合は、「校記」に記す。

一、印刷技術上の制約により、次の如き更改を余儀無くされた。

1、行字数は、底本のそれを無視した。

2、地名・人名・書名等に附された朱引及び圏点は、全て省略する。

3、底本の異体字（略字・別体・俗字・くずし字等）は、支障の無い限り原則として通行の字体に改める。

（表紙）

道德經抄 上

（元*表紙）

寛永四年八月十一日

老*子道經　河上公解
自一至五*

（副葉紙一葉）

老子道經上　廣聖義曰、書之分レ卷以為二上下一、惣二其名一曰二道德經一者、王弼所レ傳也、詹意此之惣名所二従来一者古也、凡今本分標二道經德經一者、則恐後人為レ之、蓋上卷亦自言レ治言レ兵、下卷方且論レ一論レ道論レ無論レ柔、自足三以見二道德之不一レ可レ分レ二也、

僕謂然也、雖レ然代二其人一言、名曰二道經德經一者、不下以二道德一分上レ之、唯假二道德之二字一分二上下一而

已

林希逸口義序曰、唐元宗改定章句、以上篇言道、下篇言德、尤非也　又上陽子道德經序曰、唐賜號曰道德經

僕以廣聖義考之、二説未審

道德　會上声皓匂、道、杜皓切、説文所行道也、徐曰、人所踏也、

入声職匂、德、的則切、朱氏曰、躬行有得之謂德

張洪陽注老子経、自序曰、自然為道、得道為德、又云自無生有道也、従有反無德也

経　會平青匂、経、堅靈切、一曰書也、釈名、徑也、典常也、言如徑路無所不通常用也、孝経注疏云、経者、常行之典

『1オ』

河上公章句　支林廣記老子変現之図曰、文帝時河上公

廣聖義曰、太極葛玄仙公道德経序訣云、河上公者莫知其姓名也、漢孝文帝時、結草為庵于河之濱、常讀老子道德経、即今陝州黄河之側有河上公廟、路左有漢文帝望仙臺存焉、時人不知公之姓名、常見*麻履為業居於河上、故號河上公尓

史記樂毅列傳第二十、太史公曰樂臣公学黄帝老子、其本師號曰河上丈人、不知其所出、河

上丈人教安期生、々々教毛翕公、々々教樂瑕公、々々教樂臣公、々々教蓋公、注索隱曰、蓋音、古闔反　蓋公教於齊高蜜膠西、為曹相國師

僕考高密膠西者、齊悼惠王子漢高祖■孫也、膠西王卬都密州高密縣故曰高密膠西、史記世家曰、齊悼惠王劉肥者、高祖長庶男也、其母外婦也曰曹氏

*為曹相國師*、史記世家曰、平陽侯曹參者沛人也注曹參字敬伯　又曰、孝惠帝元年除諸侯相國法、更以參為齊丞相、參之相齊、々七十城、天下初定、悼*惠王富於春秋、參尽召長老諸生、問所以安集百姓、如齊故俗諸儒以百數、言人々殊、參未知所定、聞膠西有蓋公善治黄老言、使人厚幣請之既見蓋公、々々為言治道貴清淨而民自定、推此類具言之、參於是避正堂舍蓋公焉、其治要用黄老術、故相齊九年、齊國安集大称賢相

章句　廣聖義曰、章者、裁斷音句也、句者、言之所絶也

論語古注序曰、包氏周氏章句出焉、疏章句者、訓解科段之名

廣聖義曰、詔唐玄宗撮其指歸雖蜀厳猶病　義曰、撮者、採結之謂、指者、趣向也、帰者、義理會聚也、蜀厳者、仙人厳君平居於蜀肆、作道德指帰一十四卷、恢廓浩汗為時所称■■聖旨以為道德之説文止五千、指帰之多将及數万演之於世、謂為富贍廣博詣之理傷蔓衍繁豊、故云雖蜀厳猶病也　詔摘章句自河公而或畧　義曰、摘者■■採擷分判也、章者、裁斷音句也、句者言之所絶也、自、従也、河公河上公也、聖旨以為道德尊經、并苞万法、圍制三才、理國理

1ウ

2オ

レ家之宗、修レ身修レ道之要、無レ所*不レ攝、無上レ所レ不レ周、而河上公分為二八十一章一、局二九々之數一、有レ失二大聖無為廣大之趣一、故云自二河公一而或レ畧、詔其餘浸微固不レ足レ數 義曰、其餘者、言自二蜀厳河一公二之外五十餘家註義也、浸、遠也、微、細也、數、計也、厳雖二猶病一可三以議二於重玄一、河雖二或畧一亦足レ明二其至妙一、自二外諸家一浸遠微細不レ足二比方一、固非三聖旨之所二計數一也

道書全集上陽子道德經序曰、古今解註何啻百人、惟河上公所レ釋、以授二漢文帝一者、語浅意深、今難レ得*二其真本一、經中大意第一章顕而出*レ之、了二具眼一者於レ此早分二利鈍一

2ウ

體道第一　上陽子道德經序曰、真人鄭思遠標三註八十一章之目一　纂圖互註同レ之　諸解畧號二道可一道章一

第　會去霽、廣韻、次第也、漢書注孟康曰、有二甲乙次第一故曰レ第也

一　入質　廣韻數之始也

（三行余白）

（半葉余白）

3オ

○道可レ道、

道書全集道德經上陽子註曰、夫道也者、位二天地一育二万物一曰レ道、揭二日月一生二五行一曰レ道、多二

3ウ

於洹河沙數曰道、洹河者、西方界、此河四十里、細如麵、此數之多者也　孤則独無一侶曰道、直入鴻濛而還皈　溟涬曰道、善集造化而頓超聖凡曰道、目下機境未兆而突爾靈通曰道、眼前生殺分明而無能逃避曰道、處卑汚而大尊貴曰道、居幽暗而極高明曰道、是道也有大識見之眼而無睛、有大智惠之耳而無聞、有吸西江之口而無齒、有諳妙香之鼻而不臭、有殺活舌頭而味不味、有金剛法身而在自在、有生死釼而武士不敢施用、有一字義而文人不能形容、雖黑漫々不許一眨闇然而日彰、任峭巍々壁立万仞、放身而無怖、細入刹塵曰道、大包天地曰道、將無入有曰道、作佛成仙、是道、佛經五千四十八巻也説不到了處中庸三十三章也説不到窮處、道德五千餘言也、説不到極處、道也者果何謂也、一言以定之曰気也、故鄭真人曰、道乃気之用、當知體其道者是気也、

又道書全集金丹正理大全精気説云、夫気者天地万物莫不由之、在天地之外包覆天地、在天地之内運行天地、日月星辰得以明、風雲雷雨得以動、四時品物得以生、長収蔵此唯天地間陰陽造化之気尓、得勤而用之、又有二焉、二者何也、有先天地之気、有後天地之気、今以後天地之気為言、此気生於穀、故従气従米而蓄於胃、々亦得穀而生気云々又曰何謂先天氣、重陽翁云、五行不到處、父母未生前

會去未韻、説文、ミ、本作气、雲氣也、象形、徐曰、象雲起之皃、今作氣則説文餼字也、古作汽氣、

廣韻道書作炁

（三行余白）

4オ

性理字義、論老荘道曰、老荘説道、都与人物不相干、皆以道為超乎天地器形之外、如云道在太極之先、都是説未有天地万物之初、有箇空虚道理

又論仏氏道曰、仏氏論道大概亦是此意、但老氏以無為宗、仏氏以空為宗、以未有天地之先為吾真體、以天地万物都為幻化、人支都為粗迹、尽欲屏除了、一皈真空、乃為得道

又論儒者道曰、道猶路也、當初命此字、是従路上起■意、人所通行、方謂之路、一人独行不得謂之路、道之大綱、只是日用間、人倫支物所当行之理、衆人所共由底、方謂之道、大概是就日用人支上説、方見得人所通行底意親切、若就此推原来歴、不是就人支上、劃然有箇道理如此、其根原皆是従天来、故横渠謂由太虚有天之名、由気化有道之名、此便是推原来歴天即理也、古聖賢説天多是就理上論、理無形状、以其自然而致、故謂之天、若就天之形體論也、只是箇積気恁蒼々范々、実有何形実

又曰、道非是外支物、有箇空虚底、其実道不離乎物、離物則無所謂道、且如君臣有義、々底是道、君臣是器、若要看義底道理、須就君臣上看、不成脱了、君臣之外別有所謂義、父子有親、々底是道、父子是器、若要看得親底道理、須就父子上看、不成脱了、父子之外別有所謂親、即夫婦而夫婦在所別、即長幼而長幼在所別、即朋友而朋友在所信亦非外、夫婦長幼朋友而有所謂別序与信、聖門之学無一不実、老氏清虚厭支、仏氏屏棄人支、他

4ウ

5ウ

都是把道理、做支物項頭玄妙底物看、把人支做下面粗底、便要擺脱去

『5ウ

△註謂經術政教之道也、　是可道之解也、上道字不涉言語、故不下注解也、纂圖有解、夫道者一元之至理云々、經術、經道也、不言經道、言經術者有味、會入質、術、心之所由、廣韻、技術也　政教　會去敬以法正民曰政、以道誨人曰教

上所謂道老子之道、下所謂可道之道、周公孔子之道也、言虛無自然之道下、而成仁義礼智之道也

○非常道、

△註非自然長生之道也、上陽子曰、道之体者自然也、道之用者虛無也、長生字應虛無

虛無自然之道無通塞、仁義礼智之道*有通塞、故非常道

△常道當以無爲養神、無支安民、含光藏暉、滅跡匿端、不上可称道也、無爲養神、虛一心、而養心王及身中之『諸神也、道書全集精気神説曰、夫神者妙万物而依形而生、黄庭経曰、至道不煩存真、泥丸百節皆有神、々名最多、莫能枚挙、身中三部、上部八景、髪神、脳神、眼神、鼻神、*口神、舌神、歯神、中部八景、肺神、心神、肝神、脾神、左腎神、右腎神、膽神、喉神、下部八景、腎神、大小腸神、胴神、胸神、膈神、兩脇神、左陰神、右陽神、身中九宮真人、心為絳宮真人、腎為丹元*真人、肝為蘭臺宮真人、肺為尚書宮真人、脾為黄庭宮真人、膽為天霊宮真人、小腸為玄霊宮真人、大腸為未霊宮真人、膀胱為玉房宮

6オ

真人、又有二元首九宮真人、双丹宮、明堂宮、丹田宮、泥丸宮、流珠宮、大帝宮、天庭宮、極真宮、玄丹宮、太皇宮、又有二金樓重門十二亭長一、身外有二一万八千陽神一、身内有二一万八千陰神一、共三万六千神所レ主者為二絳宮真人一、一名二肉團神一、即心王也、又有三身神、四智神、三魂神、七魄神、七元八識神一、假レ名異レ字、難レ可二悉數一、心王為二一身之君一、万神為レ之聽レ命焉

6ウ

無レ妄安レ民　義無レ隠　無為養二我神一、故無レ妄安レ民也

含レ光蔵レ暉　不二相顕威光德暉一也、非二巧而不二相顕一、自然而然

滅レ跡匿レ端　不レ知二其所一レ終、不レ知二其所一レ始也

不レ可レ称レ道　無二妄跡一故不レ可レ称レ道、若可レ称レ道者是可レ道之道也

是下二第二義門一而解レ之、非レ解二常道一、解下脩行常道一之趣上

○名可レ名

註謂二富貴尊栄高レ世之名一　富、禄之多也、貴、爵之高也、栄承二于富一、尊承二于貴一、高世誇世也

是可レ名名之解也、上名無レ解、纂圖有レ解、夫名者三才之総称　孝経正義曰、天地謂二之両一義一、兼レ人謂二之三一才一、

7オ

僕謂上名有二其名一而不レ作二其用一也

○非二常名一、

△註非自然常在之名、道無形故曰長生、名有*形故曰常在

常名當如嬰児之未言、鷄子之未分、明珠在蚌中、美玉處中石間上*

嬰児之未言　義無隱、會平庚徐按倉頡篇、女曰嬰男曰児

鷄子之未分　未出卵也

明珠在蚌中　史記亀策傳曰、明月之珠出於江海蔵於蚌中　山谷詩、老蚌胎中珠是賊　』7ウ

美玉處石間　亀策傳曰、玉處於山而木潤、渕生珠而岸不枯者、潤澤之所加也　僕謂皆*不作

其用之謂也、

△内雖昭昭、外如愚頑者也、　内、心底也、外、身所行也、

昭昭　會平蕭説文、昭、日明也　愚頑　荀子非是是非之謂愚、左傳心不則德義之經曰頑

是又下第二義門而解之、非解常名解可法行常名之趣上也

○無名天地之始、

△註無名者謂道、道無形、故不可名也　義無隱

△天地始者、道吐氣布化、出於虛無、爲天地本始也

吐氣、生陰陽二気也　布化　四時運轉也

吐氣布化之道、出於虛無為天地本始也　道書全集精気神説曰、道自虛無生一氣、便従

一気産陰陽　』8オ

○有名万物之母

△註有名謂天地、々々有形位、有陰陽、有柔剛、是其名也

有形位、天高在上地卑在下之謂

有陰陽　寒暑晝夜之謂　有柔剛　木火土金水之謂　是其名也、義無隱

△万物母者、天地含氣生万物、長大成就如母之養子也　義無隱　天地含気　天地和合之義也陰陽二気交感之謂

○故常無欲以観其妙　■曲禮疏故承上起下之語

△註妙要也、人常能無欲、則、可以観大道之要、々、謂一也、一出布名、道讃叙明是非也

妙、要也、會去嘯、妙、増韻、神化不測也、又去嘯、要樞要也

常、平常也、有味、邂逅而争観其妙

欲會入沃、欲、情所始也、廣聖義、疏、欲者、性之動、謂逐境而生心也　無欲　明明德也、大学

集註、明、明之也、明德者、人之所得乎天而虚霊不昧、以具衆理而應万事也

性理字義曰、如所謂明德者、是人生所得乎天、本来光明之理、具在吾心者、故謂之明德、如孩提之童無不知愛其親敬其兄、此便是得於天本明處

要、謂一也、一、太極也　道化第四十二章曰道生一、注、道始所生者一也

8ウ

一出布レ名　四十二章又曰、一生レ二　注陰与レ陽　二生レ三注陰陽生二和気清濁一、三気分為二天地人一也
三生二万物一注天地共二万物一也、天施地化長二養之一　是也、山河大地森羅万像、起二乎一一太極之
上一、如三百千万億之出二乎一一　『9オ

讃叙　解述之義也、讃解也、叙述也

明二是非一　物有二方圓、長短、剛柔、強弱一　以二方長剛強一為レ是、則以二圓短柔弱一為レ非、以二圓短
柔弱一為レ是、則以二方長剛強一為レ非言三道讃叙明二是非一也者一出布レ名之注釋也
言人常明二明徳一、而使下二心上一不上レ置二一箇塵芥一、則観二大道之要一、要、一也、一、万物根元也、観二
得其一一、則山河大地森羅万像、粲然落二在眼下一

○常有二欲以観二其徼一

△注徼帰也常有二欲之人可四以観三世俗之所二帰趣一也

會平徼、指趨曰レ帰也、　帰趣　企及之義也、
有欲　大学注、所レ謂為二気禀一所レ拘人欲所レ蔽也、気禀所レ拘、人欲所レ蔽之輩、能観三世俗之所二帰
趣一也、観三世俗之所二帰趣一者、利走名奔、而巧得二其術一也
大恵武庫曰、五祖和尚一日云、我這裏禅、似二箇什麼一、如二人家會一レ作レ賊、有二一児子一、一日云、
我爺老後我却如何養レ家、須下学二箇妻業一始得上、遂白二其爺一、々云好得、一夜引至二巨室一、穿窬入レ宅、開
レ櫃乃教下二児子一入二其中一取中衣帛上、、児終入レ櫃、爺便閉却復鎖了、故於二廳上一扣打、令下二其家一驚覚上
『9ウ

乃先尋二穿一窬而去、其家一人即一時起一来點レ火燭レ之、知二有レ賊但已去一了一、其賊一児在二櫃一中一、私自語曰、
我一爺何一故如レ此、正悶一々中却得二一計一、作二鼠一咬聲一、其家遣下二使一婢一點レ燈開上レ櫃、々纔開、賊一児聳レ身
吹二滅燈一推二倒婢一走出、其家一人趕至二中一路一、賊一児忽見二一一井一、乃推二巨一石一投二井一中一、其人却於二井一中一 10オ
覓、賊一児直走帰レ家、問レ爺、々曰你休レ説、你怎生得レ出、児具説二上一件意一、爺云、你恁一麼儘做一得
穿一窬　論一語陽一貨　其猶二穿一窬之盗一也與、集註穿、穿レ壁、窬、踰レ牆
廳一上　會平青、屋也
問レ爺　児向レ爺問三何故教二レ我入一レ櫃也
你休レ説　無レ言也
　僕謂賊之於二其児一、々々之於二其計一、皆是常有一欲之人、観三世一俗之所二帰一趣一也
　又謂無一欲以観二其妙一如四論一語言三君一子喩二於義一、有一欲以観二其徼一、如レ言三■小人喩二於利一

廣一聖一義曰、以レ目所レ見為レ観官、以レ神所レ鑒為レ観貫、又曰観者外以レ目周一覧、内以レ神照一徹、目覧則辯二乎
有一無一、神照則契二乎冥一寂一矣　観一妙之観音貫去一声、観一徼之観音官平一声
　僕謂、故者、承レ上起レ下之語、以レ是見レ之、承二常道常名一而起二無一欲一、承二可レ道可一レ名而起二有一欲一 10ウ

○此両者同出而異レ名

△注両者謂二有欲無欲一也、同出者、同出二人之心一也、而異レ名者、所レ名各異也　義無隠

△名二無欲一者長存、名二有欲一者亡レ身者也　無欲者終二天命一、故曰二長存一　有欲者不レ終二天命一、故曰レ亡レ身

『11オ

○同謂二之玄一

△注玄天也、言有欲之人与二無欲之人一、同受二気於天一也

玄、天也、　素問巻第二陰陽應象大論曰、其在レ天為レ玄、王注、玄、謂二玄冥一、言天色高遠、尚未二盛明一也

雖二有欲之人一、雖二無欲之人一、同受二一元之気一、而無二毫釐之差一、是老子欲教二有欲之人一明レ之、而復中其初上也

○玄之又玄

△注天中復有レ天也　復有レ天人也、道書全集精気神説曰、独人身之中、全具二天地陰陽造化之気一

性理字義曰、人物之生、不レ出二乎陰陽五行之気一、本只是一気分来有二陰陽一、々々又分来、為二五行一、二与レ五則管二分合運行一、便参差不レ斉、有レ清、有レ濁、有レ厚、有レ薄、且以二人物一合論、同是

『11ウ

一気、但人得気之正、物得気之偏、人得気之通、物得気之塞、且如人形骸、却與天地相應、頭圓居上象天、足方居下象地、北極為天中央、却在北、故人百會穴在頂心、却向後、日月來往只在天之南、故人之両眼皆在前、海鹹水所皈在南之下、故人之小便亦在前下、此所以為得気之正、如物則禽獸頭横、植物頭向下、枝葉却在上、此皆得気之偏處、人気通明、物気塞塞、人得五行之秀、故為万物之霊、物気塞而不通、如火烟欝在裏、許所以理義皆不通

△禀気有厚薄、夫人得中和滋液、則生賢聖、得錯亂濁辱、則生貪淫

禀気　人禀天気也　中和滋液　陰陽無過不及之謂

錯乱濁辱　太過不及也

性理大全巻之三十一曰、或人問自孟子言性善而荀子言性悪揚雄言善悪混韓文公言三品及至横渠張子分為天地之性気質之性、然後諸子之説始定、性善者、天地之性也、餘則所謂気質者也

又云、自孟子不説到気禀、所以荀子便以性為悪、揚子便以性為善悪混、韓文公又以為性有三品、都只是説得気、近世東坡蘇氏又以為性無善悪、五峯胡氏又以為性無善悪

又云、朱子曰、有天地之性、有気質之性、天地之性、則太極本然之妙、万殊之一本也、気質之性、則二気交運而生、一本而、万殊也

12オ

12ウ

又云、南軒張氏曰、原性之理、無有不善、人物所同也、論性之散乎気質、則人禀天地之精五行之秀、固与禽獣草木異、然就人之中、不無清濁厚薄之不同、而實亦未嘗不相近也

又云、問、人之性其気禀有清濁何也、曰二気迭運参差万端、而万物各正性命、夫豈物々而與之哉、気禀之不同、気禀之不同而其本莫不善、人欲初無體也、傳曰、人生而静天之性也、感物而動、性之欲也、直至物至知、々好悪形焉、然後有流而為悪者、非性所本有也

又云、張子所謂、気質之性、形而後有、則天地之性乃未受生以前、天理之流行者

又云、形而後有気質之性、所以有善悪之不同、何也、曰気有偏正則所受之理、随而偏正、気有昏明則所受之理随而昏明、木之気盛則金之気衰、故仁常多而義常少、金之気盛則木之気衰、故義常多而仁常少、若此者気質之性有善悪也

又云、北溪陳氏曰、蓋人之所以有万殊不斉、只縁気禀不同、這気只是陰陽五行之気、如陽性剛、陰性柔、火性燥、水性潤、金性寒、木性温、土性遅重、七者夾雑便有参差不斉、所以人間所値便有許多般撲、然這気運来運去、自有箇真元之會、如暦法算到本數湊合、所謂日月如合璧五星如連珠、時相似、聖人便是禀得這真元之會来、然天地間参差不斉之時多、真元會合之時少、如一歳間極寒極暑陰晦之時多、不寒不暑光風霽月之時極少、最難得恰好時節、人生多是値此不斉之気、如有一等人非常剛烈、是値陽気多、有一等人極是軟弱、是値陰気多、有人躁暴忿厉、是又値陽気之悪者、有人狡譎姦険、此又値陰気之悪者

又云、程子亦謂、有自幼而善、有自幼而悪、是気禀有然也、斯豈天地本然之性云乎哉、若論

13オ

13ウ

天地本然之性、則程子曰、性即理也、斯言尽之

○衆妙之門

△注能知天中復有天、稟気有薄厚、除情欲守中和、是謂知道要之門戸者也

言欲教貪淫之人而入聖賢之域也

衆妙　萬物各具一理之謂

廣聖義曰、衆妙門者、天門也、天門者、万法所生之惣名也

性理大全曰、問、性、如日月、気濁者、如雲霧、曰然、又云有是理、而後有是気、々々則必有是理、但気稟之清者為聖為賢、如寶珠在清冷水中、稟気之濁者為愚為不肖、如寶珠在濁水中、所謂明明德者、是就濁水中揩拭此珠也、物亦有是理、又如寶珠落在至汚濁處、然其所稟亦間有些明處、就上面便自不昧、問物之塞得甚者、雖有那珠如在深泥裏、面更取不出、曰也如此

又云、人之所以生、理与気合而已、天理固浩々不窮、然非是気則雖有是理、而無所湊泊、故二気交感、凝結生聚、然後是理有所附著、凡人之能言語動作思慮営為、皆気也、而理存焉、故發為孝弟忠信仁義禮智、皆理也、然就人之所稟而言、又有昏明清濁之異、故上智生知之資、是気清明純粹而無一毫昏濁、所以生知安行不待学而能、如堯舜是也、其次則亜於生知、必学而後

14オ

14ウ

知、必行而後至、又其次者資稟既偏、又有所蔽須是痛加工夫、人一己百　人十己、千然後方能及亜於生知者、及進而不已則成功也

又云、学者須是変化気質、或偏於剛、或偏於柔、必反之、如禽獣、是気質之偏、不能反也、人若不知自反、則去本性日以遠矣、若変化得過来、只是本性所有、初未嘗増添、故言性者、須分別出気質之性

又云、天下之清莫如水、先儒以水之清喩性之善、人無有不善之性、則世無有不清之水也、然黄河之水渾々而流以至于海、竟莫能清者何也、請循其初、原者水之初也、水原於天而附於地、原之初出、曷嘗不清也、出於泥塵之地者自其初出而混於其滓、則原雖清而流不能不濁矣、非水之濁也、地則然也、人之性亦猶是、性原於天而附於人、局於気質之中、人之気質不同、猶地之岩石泥塵有不同也、気質之明粋者、其性自如岩石之水也、気質之昏駁者、従性而変、泥塵之水也、水之濁於泥塵者、由其地而原之所自則清也、故流雖濁、而有清之之道、河之水甚濁、貯之以器、投之以膠則泥沈於底、而其水可食、甚濁固可使之清也、況其濁不如河之甚者乎

（以下余白）

## 養身第二

○天下皆知美之為美　廣聖義曰、天下、挙大凡、言凡在天覆之下也

15ウ　15オ

注自揚己美使顕彰也　自揚己美、則有毀人短意上

○斯悪レ己　■知美之為レ美者*、唯斯悪レ己也

注有危亡也　揚己美則毀人短、々々則有レ敵、々々則有危亡也

○皆知善之為レ善

注有功名也　會平東説文以レ労定レ國曰レ功、廣韻功績也、又平庚説文名、自命也、廣韻、大也、功也、號也

○斯不レ善レ己　■知善之為レ善者*唯斯不レ善レ己也

注人所レ争也　功名不レ遜于他、故人争レ之

廣聖義疏、美者、心所甘美也、善者、身所履行也、』言天下之人皆知下己心所甘美者上為レ美、己身所履行者為レ善、故論レ甘則忌レ辛好レ丹則非レ素、共相傾奪

論語八佾曰、子謂レ韶尽レ美矣又尽レ善也、謂レ武尽レ美矣未レ尽レ善也、朱注、韶、舜楽、武、武王楽、美者声容之盛、善者美之實也、大全朱子曰、美如人生得レ好、善則其中有徳行也、實是美之所以然處

僕考列子黄帝曰、楊朱過レ宋、東之於逆旅、々々人有妾二人、其一人美、其一人悪、々者貴而美者賤、楊子問其故、逆旅小子對曰、其美者自美、吾不レ知其美也、其悪者自悪、吾不レ知其悪也、楊子曰、弟子記レ之、行レ賢而去自賢之行、安往而不レ愛哉

書説命曰、有其善喪其善、矜其能喪其功

○故有無之相生　以故字、承上之二句、起以下之六句

』16ウ

16オ

有無不二独一立一、有中含レ無、無中含レ有、故曰二相生一

注見レ有而為レ無也　以二人我一對レ之、則見レ有便為レ無、見レ無便為レ有也

廣一聖一義疏、此明二有一無性空一也、夫有不二自有一、因レ無而有、凡俗則以レ無生レ有、無不二自一無一、因レ有而無、凡俗則以レ有生レ無、故云相生而有一無對一法本不二相一生一、相一生之名、由二妄一執一起、如下美一悪非二自一性一生上、是皆空*、故聖一人将レ欲レ救二其迷一滞一、是以歴二言六一者之惑一

○難一易之相一成

注見レ難而為レ易也　義同于前

疏此明二難一易法空一也、此以レ難故彼成レ易、此以レ易故彼成レ難、亦如下工一者易二於木一而難二於陶一、甄一匠易二於埴一而難中於木上、故云難一易相一成、若同二其所一レ難、則無レ易、同二其所一レ易則無レ難、々一易無レ實、妄生二名一称一、是法■空、故能了レ之者、巧一拙両忘、則難一易名一息、只如三美一悪無二定一故一也

○長一短之相一形

注見レ短而為レ長也　義同于前

疏、此明二長一短相空一也、以レ長故形レ短、以レ短故形レ長、故云長一短相一形、亦如下鳧一脛非レ短、以二鶴之長一、故續レ之則憂、鶴一脛非レ長、因二鳧*之短一、故断レ之則悲上、見二長一短相一、猶三美一悪既無二定一体一

17オ

○高下之相傾

注見高而爲下也　義同于前

疏、此明高下名空也、高下両名互相傾奪、故称高必因於卑、又有高之者、■称下必因於高、又有下之者、又高則所高非高、又下則所下非下、如彼代間凡諸名位遞為臣妾亦復無常、是皆空故、々無定位

『17ウ

○音聲之相和　注上唱下必和也　上唱、發声也、下和、賡載歌也

○前後之相隨　注上行下必隨也

有無難易長短高下之四句、一意、音声前後之二句一意、諸解畧作六句一意、河公且分之、故於是不言見音而為声也、見前而為後也

會平侵、宮、商、角、徵、羽、声也、絲、竹、金、石、匏、土、革、木、音也、又云詩序声成文謂之音、

礼記月令疏、雜比曰音、単出曰声

廣聖義義曰、夫中道者非陰非陽無偏名也、處天地之間、傲然自放所遇、而安了無功名、而反乎道、本雖堯桀之殊、生死之変、是非之別、壽夭之異、栄賤之隔、哀■楽之感動、古今之遞代、皆忘之也、不知堯桀之殊、忘美悪也、不知死生之変、忘有無也、不知是非之別、忘難

『18オ

易、不レ知二壽夭之異一、忘二長短一也、不レ知二栄賤之隔一、忘二高下一也、不レ知二哀楽之感動一、忘二音声一也、不レ知二古今之遞代一、忘二前後一也　六句一意之解也

○是以聖人處二無為之叀一　疏、是以、説レ下明レ上也

注以レ道治也、　道、常道也、不レ知二美之為一レ美、不レ知二善之為一レ善之謂

○行二不言之教一　注以レ身師二導之一也　義無隠

義曰、夫聖人者、與二天地一合二其德一、日月合二其明一、四時合二其序一、鬼神合二其吉凶一、謂二之聖人一也、

畧而言レ之、凡有二五種一、第一得二道之聖太上老君諸天大聖是也、第二有二天下之位一兼二得仙之聖一、

伏羲、黄帝、顓頊、少昊、堯舜是也、第三有二天下之位一■而無二得仙之聖一、殷湯文武是也、皆廓清

六合一、不レ言二昇天一矣、第四、博瞻之聖、無二天下之位一者、周公孔子、制二作禮樂一、垂二範百王一、而

無二九五之位一、而皆具二天地合德之美一也、第五有二独長之聖一、而無二博瞻之名一、亦不レ具二上衆美一者、謂

百牙師文為二鼓レ琴之聖一、子卿綏明、能レ基之聖、鍾期延州、知音之聖、韓娥秦青謳謌之聖、龔

叔文摯智洞之聖、離朱師曠視聽之聖、張芝鍾繇草書之聖、今經中明者、指二言理天下之聖一也、

理天下之聖、垂二衣裳一恭レ己南面而已矣、何為哉所レ謂處二無為之叀一也、原二天地美一、達二万物之

理一、順二四時之行一、君無為於上一、物自化於下一、可レ謂行二不言之教一也、理レ國如レ此、則人安二其居一楽二其

俗一与レ道合矣

○万物作焉　以下挙二道之良能一、而喩二聖人之治一

18ウ

注各自動作也　各、万物也、動作、出生之義也

○而不レ辞　不レ辞受也

注不二辞謝而逆止一也、會平支辞説文不レ受也、去禡謝説文辞去也、入陌逆説文郤也、上紙止廣韻、停也息也

言、柳成レ緑花成レ紅、松葉細、荷葉圓、鳥飛レ天、魚躍レ渕、獣走二山林一、日々夜々、雖二千変万化一、道以不レ為レ方、能受レ之

19オ

○生而不レ有

注元気生二万物一而不レ有也　元気、無二其形一而有二其理一之謂　會上有、有、取也

言道雖三發二生万物一、不三取以為二己私一之謂

○為而不レ恃

注道所二施爲一不三恃二望其報一也　會上紙、恃説文頼也　義無隠

○功成而不レ居

注功成支就退避不レ居二其位一也　■　會平東、功績也、説文以レ労定レ國曰レ功　功成應二于道一、支就應二于万物一

為レ花不二春住少時一、速化レ夏而去、為レ月不二秋住少時一、速化レ冬而去之謂

義曰、夫功者王功曰レ勲、輔二成王業一、若二周公一也、國功曰レ功、保二全國家一、若二伊尹一也、民功曰

19ウ

レ庸、施二法於民一、若二后稷一也、叀功曰レ労、以レ労定レ國、若二夏禹一也、理功曰レ績、制レ法成レ理、若二咎繇一也、戦功曰レ多、剋レ敵出レ奇、若二韓信一也、生二成万物一者玄功也、其功深遠曰レ玄也、功成而不レ居、所三以全二無為之功一也

○夫唯不レ居　注夫唯功成不レ居二其位一也　義曰、夫唯者、發句之語也、會平虞夫語端辞　平支唯專辞也省二功成字一加二夫唯字一、再言レ之者其堅也

○是以不レ去　聖主之於二世民一、如三道之於二萬物一、是以福禄常在レ身而不レ去

注福德常在不レ去二其身一也　會入屋福百順之名、入職德躬有レ得之謂レ德　其身聖人也　義無隠

此言不レ行不レ可レ隨、不レ言不レ可レ知　此言　惣而解二此一章之義　不レ行不レ可レ隨　經曰、前後之相隨注上行下必隨　出二于此一、言、上不レ行、下不レ可レ隨

不レ言不レ可レ知　經曰、行二不言之教一注以身師導之一也　出二于此一、言、上不レ言下不レ可レ知

疾三上六句有二高下長短一　有無難易長短高下音声前後之■六句也、摘二中央之二句一兼二上下一

君開二一源一下生二百端一　三暑曰、一令逆則百令失、一悪施則百悪結

百端之変無レ不二動乱一也　義無隠

安民第三

『20オ』

『20ウ』

○不レ尚レ賢

注賢、謂二世俗之賢辯レ口明レ文離レ道行レ権去レ質為一レ文也

世俗之賢　非二真賢一也

辯レ口明レ文　巧二言語一明二文章一也

離レ道行レ権　離二経道一行二権道一也　會平先、権反レ常也、漢儒以二反レ経合一レ道為レ権

去レ質為レ文　去二質樸一為二文飾一也

論語顔淵第十二曰、棘成子曰、君子質而已、何以文為、朱注棘成子衛大夫疾二時人文勝一故為二此言一、子貢曰、惜乎夫子之説二君子一也、駟不レ及レ舌言子成之言乃君子之意、然言出二於舌一、則駟馬不レ能レ追レ之、又惜二其失言一文猶レ質也、質猶レ文也、虎豹之鞟猶二犬羊之鞟一鞟、皮去レ毛者也、言文質等耳、不レ可二相無一、若必尽去二其文一、而独存二其質一、則君子小人無二以辨一矣

僕謂子貢説レ中　河公矯レ之

不レ尚者不二貴レ之以一レ禄不二尊レ之以一レ官也　義無レ隠

禄、俸禄也、官、官爵也

○使二レ民不一レ争

21オ

注不レ争二功名一、反二自然一也　不三尚二用世俗之賢一、故民不レ争二功名一、反二自然一也

○不レ貴二難レ得之貨一

注言人君不レ御二好珎一

黄金弃二於山一、珠玉捐二於渕一也　実不三弃二捐之一、不レ拘之謂、若実弃二捐之一、又是不二弃捐一也

世説、管寧字幼安與二華歆一共レ園鋤レ菜、見二地有一レ金、寧揮レ鋤与二瓦石一不レ異、歆捉而擲レ之、又嘗同レ席讀レ書、有乗レ軒冕過レ門者一、寧讀レ書如レ故、歆廢レ書而看、寧割レ席分レ坐曰、子非二吾友一也

○使二民不一レ為レ盗

注上化清浄、下無二貪人一也　上化、人君之徳化也、貴二用難レ得之貨一、則民為レ盗不レ止也

○不レ見二可欲一　會上哿説文、可、肯也、入沃、欲、情所レ好也

注放二鄭声一遠二美人一也　論語陽貨十七曰、子曰、悪二紫之奪一レ朱也、悪三鄭声之乱二雅楽一也、悪下利口之覆二邦家一者上集注、朱、正色、紫、間色、雅、正也、利口、捷給、覆、傾敗也　○范氏曰、天下之理正而勝者常少、不正而勝者常多、聖人所二以悪一レ之、利口之人、以レ是為レ非、以レ非為レ是、以レ賢為二不肖一、以二不肖一為レ賢、人君苟悦而信レ之、則國家之覆也不レ難也　大全双峯饒氏曰、鄭衛之樂以二淫声一乱二正声一、以三其能悦二人之耳一也、故聖人悪レ之

禮記十一樂記曰、魏文侯曰、吾端冕而聴二古樂一、則唯恐レ臥、聴二鄭衛之音一、則不レ知レ倦

『21ウ

『22オ

○使レ心不レ乱

注不邪ー淫ー也　邪、平麻、不レ正也、平侵婬説ー文私逸也、通作レ淫

上不レ見ニ可ー欲ー、則下使ニレ心不レ乱也

○是以聖ー人之治

注謂ニ聖ー人治レ國猶レ治レ身也　猶レ治レ身者見ニ以ー下之文ー

義曰、天ー真皇ー人謂ニ皇ー帝ー曰、未レ聞身ー理而國不レ理者、夫一ー人之身、一ー國之象也、胸ー腹之位、猶ニ宮ー室ー也、四ー支之別、猶ニ郊ー境ー也、骨ー節之分、猶ニ百ー官ー也、神、猶レ君也、血猶レ臣也、気猶レ民也、知レ理レ身則知レ理レ國矣、■愛ニ其民ー所ニ以安ー國也、吝ニ其レ気ー所ニ以全ー身也、民散則國ー亡、気ー竭則身ー死、亡者不レ可レ存、死者不レ可レ生、銷ニ未ー起之患ー、理ニ未ー病之疾ー、気難レ養而易レ濁、民難レ聚而易レ散、理ニ之於無ー妄之前ー、勿レ追ニ之於既ー逝之後ー、子勗之焉

○虚ニ其心ー　注除ニ嗜ー欲ー去ニ乱ー煩ー也　義無隠

實ニ其腹ー　注懐レ道抱レ一守ニ五ー神ー也

成象第六注、神、謂ニ五ー蔵之神ー也、肝蔵レ魂、肺蔵レ魄、心蔵レ神、腎蔵レ精、脾蔵レ志

義曰惟ー道集レ虚、々レ心則道集ニ於懐ー也、道ニ集ニ於懐ー、則神与レ化遊、心与レ天通

又曰、夫心者嗜ー好無レ窮、腹者含ー受有レ足、心無レ窮、故虚レ之、腹有レ足、故實レ之、心虚則衆ー欲不レ生、腹實則貪ー求自ー止

又曰、内ー観ー經曰、夫心者非レ青、非レ赤、非レ白、非レ黄、非レ長、非レ短、非レ圓、非レ方、大包ニ天ー地ー、細入ニ

『22ウ』

『23オ』

毫芒ニ制スルレ之則止、放スレ之則往、清浄ナルスハ則生、濁躁ナルスハ則亡

○弱シ其志ノヲ　義曰、夫心之所ル起ル為レ志ト、所ヲ行為レ支ト

注和柔謙ニ讓ニ不レ處レ権ニ也

○強ス其骨ノヲ　疏、骨者躰之幹

注愛ミ精ヲ重スレ施ス髄テ満骨テ堅シ也　愛シ惜真ノ元之気ヲ、遅ク重スルスハ施用ヲ支ニ々ニ、則髄能満テ而骨能堅シ也　一義、愛レ精ヲ重レ施ス愛シ惜ミ堅ノ精ヲ而遅ク重スル支ヲ也

義曰、弱スルスハ其志ノヲ則廉柔ニ不レ犯ニ於外ニ、強スルスハ其骨ノヲ則堅固ニ有レ備ニ於内ニ　會上紙髄説ニ文骨ニ中ノ脂

○常ニ使ニ民ヲ無ニ知無ニ欲ナラ

人ニ君虚シ其心ノヲ、實其腹ノヲ、弱シ其志ノヲ、強ス其骨ノヲ、而常ニ使ニ民ヲ無ニ知無ニ欲ナラ也

注反リ朴ニ守ルレ淳ヲ也　反テ質ニ朴ニ、而守ル淳ヲ素ヲ也

○使下ス夫ノルヲ知者ノヲ不中テ敢為上也　未タ使ス無ニ知無ニ欲ナラ之ノ民、所レ謂夫知者ナリ也、夫知者ノ之下、加テ欲スルノ者之両ニ字ヲ、可レ見レ之ヲ、使人下ス未ニ無ニ知無ニ欲ナラ人上ヲ皈セ地無ニ為ニ天也

一義、夫知ニ者、發ニ語ニ所レ謂ト云ノ不レ尚ト賢ヲ之賢ナリ也

廣ニ聖ニ義ニ曰、清ニ浄ニ化ソシレ人ヲ、尽無ニ知ニ欲ニ適有ト知者ニ、令ニ敢テ不レ為也、是又一義也

注思ニ慮深ノ不ニ輕ク言ニ也　夫知者ノ已ニ化ス、故思ニ慮深ノ而不ニ輕ク言ニ也　義曰、下ニ化ス於上ニ、猶ニ風ノ偃レ草ヲ、淳ニ和普ニ洽スルスハ則皆返ニ無ニ為ニ也

『23ウ

『24オ

○為寸ハ無ヲ為一　注不造作セ動因テ循ス也

○則寸ハ無ト云フレ不ト云フレ治矣　注德化厚ノ百ノ姓安シ也

上之ノ為字有レ味、居テ自ニ然ニ而行ノ自ニ然ヲ之謂、然則寸ハ無ト云フレ物而不ト云フレ治也

義ニ曰、無ノ為之理其大ナルカナ矣哉、無ハ為者ス非レ謂ニ引テ而不レ来、推テ而不レ去、迫テ而不レ應ーセ、感ノ而不レ動、堅ニ滯ノ而不レ流、捲ニ握ノ而不ヲ散也、謂ニ其ノ私ニ志不レ入ニ公ニ道ニ、嗜ニ欲不レ枉ニ正ニ術ヲ、循テ理ニ而挙レ支ヲ、因テ資ニ而立レ功ヲ、支ニ成テ而身不レ伐、功立テ而名不レ有、若ヲ夫水用ニ舩ヲ、砂用ニ肆ヲ、泥用ニ橇ヲ、山用ニ樏ヲ、夏ニ瀆冬ニ陂、因テ高ニ而田タツクリ、因テ下而池イケツクルカ、故ニ非ス吾ノ所レ謂ニ為ニ也、乃無ナリ為ナリ矣、聖ニ人ノ之無ナリ為也

書ニ益ニ稷沈ニ氏カニ注曰、水乗ニハ舟ニ、陸乗ニハ車ニ、泥乗ニハ輴チンニ、敕倫反山乗ニハ樏ルイニ、倫追反輴チン、史ニ記ニ作レ橇ニ丘妖反、漢ニ書作レ毳ニ、以レ板ヲ為レ之ヲ、其ノ状如シ箕ノ、擿陟革反行泥ニ上ニ、樏史ニ記ニ作レ橋ニ、漢ニ書作レ梠ニ、俱玉反以レ鐵ヲ為レ之ヲ、其ノ形似レ錐ニ、長半ニ寸、施ニ之ヲ履ニ下ニ、以上レ山ニ、不ニ蹉ニ倉何反跌ケツセ一奇列也

（以下余白）　24ウ

（半葉余白）　25オ

無源第四　無ハ源ノ無ニ根ニ源ニ之義也

○道ハ沖ニ而用ーアリ之　疏ニ、沖ハ、虚ナリ也、謂ニ道以ニ沖ニ虚ヲ為ヲ上レ用ーヲ也

會平東、蚩、説ニ文虚ニ器ナリ也、老子道ハ蚩ニ而用ーアリ之、通作ニ沖ニ、又曰、沖或省作冲、又和也深也　25ウ

注沖、中也、道匿レ名藏レ誉、其用在レ中者也　天何言哉四時行焉百物生焉之謂

○或不レ盈　注或常也、道常謙虚不二盈満一也　功成而不レ居之謂　道雖レ為二万物之宗一似三常謙虚而不二盈一満一也

○渊兮似二万物之宗一　廣聖義、渊、深静也、似字有レ味

注道渊深不レ可レ知也、似レ為二万物宗祖一也

義曰、道常謙虚而不二盈満一、沖和澄*澹処二其中一、深玄寂静為二物之主一、故物失二沖和之道一、必致二敗亡一、人失二沖和之道一則至二死滅一、君失二沖和之道一則政擾民離、臣失二沖和之道一則名亡身辱、是以知二沖和之道一、万物恃レ之以安、為二万物之宗一

○挫二其鋭一　注鋭進也、人欲三鋭レ情進取二功名一、当下挫二止之一法中道不中自見一也

○解二其紛一　注紛、結レ恨也、当下念二道無一為一以解釋之上也

疏、挫、抑止也、鋭、銛利也、解、釋散也

○和二其光一　注言雖レ有二獨見之明一、当レ如二闇昧一、不レ当二以曜乱人一也　六韜曰、微哉聖人之徳、誘二乎獨見一、直解曰、衆人所レ不レ能二見而樂一レ之、而聖人独見独樂耳

○同二其塵一　注当下與二衆庶同中垢塵上、不レ当二自別殊一也

疏道之沖用二於物一不レ匱、在レ光則與レ光為レ一、在レ塵則與レ塵為レ一　義曰、光者、明浄也、塵者混乱也

26オ

26ウ

○湛兮似二或一存一

注言道湛一然安一静、故長存不レ亡也

○吾不レ知二其誰之子一　疏、吾者老一君自一称也

注老一子言二我不一レ知三道所二従生一也

義曰、老一君大一聖、豈不レ知三至一道之宗一本一耶、設二此疑一似之詞一、用暁二迷一方之俗一尓

○象二帝之先一　廣聖義曰、吾不レ知三道所二従生一、明三道非二生一法一、故無レ父、道者似レ存二乎帝先一尓、帝者生一物之

■主、象、似也

疏曰、帝者生一物之主、興一益之宗、又解云、兆レ見曰レ象、言此生一物之帝能兆レ見二物一象一、故謂二之象一レ帝尓、

注道似レ存二天一帝之前一、此言道乃先二天一地一生也、至レ今存者、以三能安一静湛一然不二労一煩一也　義無レ隠

欲レ使二人脩レ身法一レ道也　河上解二餘一意一

（以下余白）

虚用第五　於二空一虚之地一其用不レ尽

○天一地不レ仁

『27ウ

27オ

注天施地化不以仁恩任自然也　天以陽気施之、地以陰気化之、雖発生万物、不為己之仁恩、任之自然也

義曰、夫以仁為仁則有執、不以仁為仁則無私、帝王之視羣生、猶天地之視万物、々々自生自化、天地不以為功、羣生爰居爰處、帝王不以為惠

○以万物為芻狗

注天地生万物、人最為貴　書泰誓曰、惟天地万物父母、惟人万物之霊、沈氏注、大哉乾元万物資始、至哉坤元万物資生、天地者万物之父母也、万物之生、惟人得其秀而霊、具四端備万善、知覚独異於物

28オ

天地視之、如芻草狗畜、不責望其報也

會平虞説文、芻、刈艸為也、又祭統士執芻、注稾也、上有、尓雅犬未成毫曰狗

荘子外篇天運　夫芻狗之未陳也、林注芻狗結草為狗以解厭也、祭時所用、已則棄之

廣聖義、不仁者、不為仁惠也、芻狗結草為狗也、犬以守禦則有弊蓋之恩、今芻狗徒有狗形而無警吠之用、故無情於仁愛也、言天地視人、亦如人視芻狗、無責望尓

義曰、禮記檀弓曰、仲尼之畜狗死、使子貢埋之、子曰、吾聞之弊帷不弃為埋馬也、君之路馬死埋之以帷、弊蓋不弃為埋狗也、丘也貧無蓋、於其封也亦与之席、無使其首陷焉、恐其首直委於土也　禮記鄭注封當為窆、陷謂没於土　又曰、路馬、君所乗者、其他狗馬死不能以帷蓋

28ウ

○聖人不仁　注聖人愛養万民、不以仁恩、法天地行自然者也　義無隠　毀仁末而皈仁本也

○以百姓為芻狗　注聖人視百姓、如芻草狗畜、不責望其禮意也　義無隠

○天地之間　注天地之間空虚和気流行、故万物自生　陰陽中和之気、無處不臻也

人能除情欲、節滋味、清五臓、則神明居之也

除情欲、七情六欲除棄之也　節滋味　滋味美食也、節、不過也　清五臓　五臓　肝、肺、心、腎、脾也　清　不濁也

神明居之　神明得其處、故居之不去也

○其猶橐籥乎　注橐籥中空虚、故能有聲気也、　天地之間空虚、而和気流行、猶如橐籥之中空虚而能出声気也

會入藥、説文、橐、囊也、又徐曰按字書有底曰囊、無底曰橐

又入藥、説文、籥、本作龠、樂之竹管三孔、以和衆声也、又徐按詩左手執龠、傳云、三孔笛也、又詩注六孔、郭璞曰、如笛三孔而短小、廣雅七孔、釈名、籥躍也、気躍而出

廣聖義、橐者、韛也、籥者、笛也、橐之皷風笛之運吹皆以虚而無心、故能動而有應、則天地之間生物、無私者、亦以虚無々心故也

疏曰、橐、韛也、謂以皮裏皷風以吹火也、籥、笛也

29オ

29ウ

義曰、橐乃皮ニ橐以鼓レ風、籥乃竹ニ管以運レ気、橐鼓レ風、無レ籥不レ能レ運、籥運レ気、無レ橐不レ能レ鼓、兩者相ニ須而行、以明下天ニ地為レ橐五気為レ籥含レ虚運ニ動以生二万ニ殊一而無中屈ニ竭一

○虚而不レ屈、動而愈出　注言空ニ虚無レ有二屈ニ竭一、時揺二動之一益出二声ニ気一也　虚而不レ屈、理也、動而愈出、支也

○多ニ言數窮　多ニ言　多二言ニ語一也、數ニ窮、速尽之義也、會入覚、數、尓雅疾也、孟子支レ君數、註謂二速ニ數一也、平東説ニ文、窮、極也

注多ニ支害レ神、多ニ言害レ身、口ニ開舌ニ挙、必有二禍ニ患一也　義無隠

○不レ如レ守レ中　中、道之微ニ妙、而難レ見也

注不レ如下守二徳於中一、育二養精ニ神一、愛レ気希上レ言也

（以下余白）

（一葉白紙）

成ニ象第一六

○谷レ神不レ死　注谷養也、人能養レ神則不レ死也

30オ

30ウ

31ウ

疏、神者、不測為名、死以休息為義、不測之應、未嘗休息、故谷神不死

義曰、不死者、非謂死生之死、是休息之死

神、謂五臓之神也、肝蔵魂、肺蔵魄、心蔵神、腎蔵精、脾蔵志、五臓尽傷、則五神去也

五臓各有名、総謂五臓之神者、神蔵於心、々五臓之長也、挙其長而兼之

臓、會去漾、臓腑也、通作蔵、又後馬融傳、平和臓腑、注韓氏外傳、精蔵於腎、神蔵於心、魂蔵於肝、魄蔵於肺、志蔵於脾、此謂五蔵

霊樞弟一本神篇曰、何謂德、気、生、精、神、魂、魄、心、意、志、思、智、慮、請問其故、岐伯答曰、天之在我者德也、地之在我者気也、德流気薄而生者也、故生之来謂之精、兩精相搏謂之神、隨神往来者謂之魂、並精而出入者謂之魄、所以任物者謂之心、々有所憶謂之意、々之所存謂之志、因志而存変謂之思、因思而遠慕謂之慮、因慮而處物謂之智、故智者之養生也、必順四時而適寒暑、和喜怒而安居処、節陰陽而調剛柔、如是則僻邪不至、長生久視

馬氏注、此詳言人身德気等義、而智者為能養生也、天非無気而主之以理、故在我之德天之德也、地非無德而運之以気、故在我之気、地之気也、則吾之生德所流、気所薄而生者也、故謂之生、然生之来者謂之精、易曰、男女搆精而万物化生、則吾人之精雖見於有生之後、而實由有生之初精、為之本也、人生有陰斯有営、有陽斯有衛、営衛相搏神斯見焉、其所謂魂者属于陽、然魂隨神而往来、其所謂魄者属于陰、然魄則並精而出入、正以精對神而言則精為陰而神為陽、故

32オ

32ウ

魂属レ神而魄属レ精也、其所レ謂心意■志思智慮挙不レ外二于一心一耳、故凡所二以任一レ物者謂二之心一、

素問霊蘭秘田論曰、心者君主之官神明出焉、則万物之夥、孰非二吾心之所レ任者一乎、由レ是心有レ所レ憶者意也、意有レ所レ存者志也、志有レ所レ変者思也、思有レ所レ慕者慮也、慮有レ所レ処者智也、此十三者愚人則傷レ之

五神、五臓神也、人形与レ神相具而立、素問第一上古天真論曰、形与レ神俱、而尽終二其天年一、度二百歳一乃去

『33オ』

○是謂二玄牝一　謂レ在二玄牝一之義也

注言不死之道在二於玄牝一、玄、天也、於レ人為レ鼻、牝、地也、於レ人為レ口　玄天也、素問注、玄謂二玄冥一、言天色高遠、尚未二盛明一也　牝地也　會上軫、牝、畜母也、陰獣象レ地也

天食レ人以二五気一従レ鼻入蔵二於心一、五気清微為二精神聰明■音声五性一、其鬼曰レ魂、々者雄也、主下出入於二人鼻一与レ天通上、故鼻為レ玄也

五気　風、熱、湿、燥、寒　清微　清浄微妙之義

■■■

地食レ人以二五一味一從レ口入蔵二於腸一、五一味濁一辱為二形體骨肉血脉六一情一、其鬼曰レ魄、々者雌也、主下出一入於二人口一與レ地通上、故口為レ牝也

五一味　酸、苦、甘、辛、鹹　濁一辱　垢一濁汚一辱之義　五一気無レ體而輕、故曰二清一微一、五一味有レ體而重、故曰二濁一辱一

形　如三分称二眼耳鼻一之謂　體　合而称之謂、骨、會入月、骨肉之覈也、徐曰、覈、核也、肉、入屋説一文肉胾肉象形、徐曰、肉無二象一形一、故象其為胾　血入屑釈一名血、濊也、出二於肉一、流而濊一々　脉入陌■説一文脉血一理之分衷、行二體一中一者、本作レ衄、徐曰、五臓六府之気分流四

其鬼為レ魄　其鬼解二于前一、會入陌魄、陰一神也

魄者雌也　雌、陰一鳥也、雌、陰之義也、承二玄一牝之字一而曰レ雌而已、別無レ義

素一問第一一六一節蔵一象一論曰、天食レ人以二五一気一、地食レ人以二五一味一、五一気入レ鼻蔵二于心一肺一、上使下二五一色一修レ明、音一声能一彰上、五一味入レ口蔵二於腸一胃一、味有レ所レ蔵、以養二五一気一、々和而生、津一液相一成、神乃自一生

馬氏注、陽為レ気、々本二于天一而上、天之五一気乃天之所二以食一レ人者也、故五一気入二于鼻一、以通二于五一蔵一、而蔵二于心一肺一、遂使下二五一色一修レ明音一声能彰上矣、陰為レ味、々本二于地一、而万一物之五一味、乃地之所二以食一レ人者也、故五一味入二于口一、以通二于六一腑一、而蔵二于腸一胃一、遂使三レ味有レ所レ蔵以養二五一気一、則気和而生津一液相一成、神気乃自一生矣

素一問第一一陰一陽應一象大一論東方之下、馬一氏注曰、■■■

在テハ二五一変ニ一為レ握、在テハ二五一竅ニ一為レ目、在テハ二五一味ニ一為レ酸、在テハ二五一志ニ一為レ怒、名雖ニ二萬一殊ナリト一、理無ニ二一致ニ一、皆属スルヲ之ヲ△ニ木ニ一而一已

南一方ノ之ノ下ニ注ニ曰、其在テハ二天ノ五一気ニ一、為レ熱、在テハ二地ノ五一行ニ一為レ火、在テハ二人ノ五一體ニ一為レ脉、在テハ二五一蔵ニ一為レ心、在テハ二五一色ニ一為レ赤、在テハ二五一音ニ一為レ徴、在テハ二五一声ニ一為■レ笑、在テハ二五一変ニ一為レ憂、在テハ二五一竅ニ一為レ舌、在テハ二五一味ニ一為レ苦、在テハ二五一志ニ一為レ喜、名雖ニ二万一殊ナリト一、理無ニ二一致ニ一、皆属スルヲ二之ヲ△ニ水ニ一而已 *

34ウ

中一央ノ下ノ之ノ注ニ曰、其在テハ二天ノ五一気ニ一為レ湿、在テハ二地ノ五一行ニ一為レ土、在テハ二人ノ五一體ニ一為レ肉、在テハ二五一蔵ニ一為レ脾、在テハ二五一色ニ一為レ黄、在テハ二五一音ニ一為レ宮、在テハ二五一声ニ一為レ歌、在テハ二五一変ニ一為レ噦、在テハ二五一竅ニ一為レ口、在テハ二五一味ニ一為レ甘、在テハ二五一志ニ一為レ思、名雖ニ二万一殊ナリト一、理無ニ二一致ニ一、皆属スルヲ二之ヲ△ニ土ニ一而一已 *

西一方ノ下ノ注ニ曰、其在テハ二天ノ五一気ニ一為レ燥、在テハ二地ノ五一行ニ一為レ金、在テハ二人ノ五一體ニ一為二皮一毛一、在テハ二五一蔵ニ一為レ肺、在テハ二五一色ニ一為レ白、在テハ二五一音ニ一為レ商、在テハ二五一声ニ一為レ哭、在テハ二五一変ニ一為レ欬、在テハ二五一竅ニ一為レ鼻、在テハ二五一味ニ一為レ辛、在テハ二五一志ニ一為レ憂、名雖ニ二万一殊ナリト一、理無ニ二一致ニ一、皆属スルヲ二之ヲ△ニ金ニ一而一已

北一方ノ之ノ下ニ注ニ曰、其在テハ二天ノ五一気ニ一為レ寒、在テハ二地ノ五一行ニ一為レ水、在テハ二人ノ五一體ニ一為レ骨、在テハ二五一蔵ニ一為レ腎、在テハ二五一色ニ一為レ黒、在テハ二五一音ニ一為レ羽、在テハ二五一声ニ一為レ呻、在テハ二五一変ニ一為レ慄、在テハ二五一竅ニ一為レ耳、在テハ二五一味ニ一為レ鹹、在テハ二五一志ニ一為レ恐、名雖ニ二万一殊ナリト一、理無ニ二一致ニ一、皆属スルヲ二之ヲ△ニ水ニ一而一已、

35オ

私云

在天五気　風、熱、湿、燥、寒　在地五行　木、火、土、金、水　在人五體　筋、脉、肉、皮毛、骨

在五蔵　肝、心、脾、肺、腎　在五色　蒼、赤、黄、白、黒　在五音　角、徴、宮、商、羽

在五声　呼、笑、歌、哭、呻　在五変　握、憂、噦、欬、慄　在五竅　目、舌、口、鼻、耳

在五味　酸、苦、甘、辛、鹹　在五志　怒、喜、思、憂、恐

義曰、夫玄天也、於人為鼻、牝地也、於人為口、元和之気、惠照之神、在人身中出入鼻口、呼吸相應以養於身、故云谷神也、又天之五気、従鼻而入、其神曰魂、上与天通、地之五味従口而入、其神曰魄、下与地通、言人養気則与天為徒、久而不已、可以長生、陽錬陰也、食味則与地為徒、久而不已、生疾致死、陰錬陽也

『35ウ

○玄牝之門、是謂天地之根　玄牝之門、鼻口之竅也、天地之根　通於天地之根元也

注根元也、言鼻口之門、是乃天地之元気、所従往来也、

天地之元気、五気五味也

○綿々乎若存　會平先、綿不絶皃

若存　若存　若亡之謂　若之字有味

注鼻口呼吸喘息、當綿々微妙、若可存、復若無有也　呼吸　會平虞、出息為呼入息為吸

喘息　上銑説文喘疾息也、入職息徐曰、自鼻也、気息従鼻出、呼吸係于口　喘息係于鼻

微妙　難測之謂

疏綿々、微妙不絶之意也

○用之不勤　用之、養用鼻口之気也、不勤　寛舒而不急疾也　此四字受用底

注用気當寛舒、不當急疾勤労也　義無隠

『36オ

（以下余白）

韜光第七　會平豪説文、韜、釵衣也、增韻蔵也、韜光、聖人閉蔵德光、而不相彰之義　經所謂後身外身是韜光之謂

『36ウ

○天長地久　注説天地長生久壽以諭教人也　於是聊解一章之大意

疏天以気象故称長、地以形質故称久　義曰、老君将明天地長久之義、以教中理世之君上、故於章首、自挙其問、天以気象者、列子云、天積気也、無處無気、地積塊也、無處無塊、積気為象、々、虚也、積塊為形、々、實也、易繫辞曰、在天成象、在地成形、変化見矣、上象下形、故能変化孳生万物也

*私云長無窮之義也久不朽之義也

○天地所以能長且久者、以其不自生　不自生以万物不自生也　注天地所以独長且久者、以其安静施不求報

独長、自開闢至今日独長也、独長、無支之義也

不如人居處汲々求自饒之利、奪人以自與也　義無隠

居處、居處世間也、汲々會入緝説文汲引水於井也、增韻、汲々不休息皃

○故能長生　注以其不求生故能長生不終也　義無隠

○是以聖人後其身　是以、以天地之理也

『37オ

注先人而後己也　義無隠

○而身先以後其身故身先也　注天下敬之先以為官長也

○外其身　内外之時外疎而内親也

注薄己而厚人也

○而身存　以外其身故身存也　注百姓愛之如父母神明祐之若赤子故身常存也　神明、天

理之所行、

義曰、理國不矜貴、以有為不労人、以自奉、所謂後身外身也、太古之君、志包天地、澤及天下、而不知其誰氏、其生無爵、不有其位也、其死無謚、不名其功也、其實不聚、其名不立、天下樂推、万物欣戴、可謂後身而身先外身而身存也、世之衰也、其君則不然、恣身之欲、而役於人、殫人之力、以奉其己、人労政弊、天下去之、此所謂外身後身之道也、豈若碎琥珀之枕、焚雉頭之裘、罷一臺之費、却千里之馬、徳垂當代、名光竹帛乎、修身之士不嗜栄辱外其身也不為躁進後其身也如此則身存而徳充々々則人服可謂身先身存矣反於此者道遠乎哉

○非以其無私耶　注、聖人為人所愛、神明所祐、非以其公正無私所致乎

○故能成其私　以其無私故能成私也

注人所以為私者、欲以厚己也　故不成私也

聖人無私而己自厚、故能成其私也

（以下余白）

易性第八　易、難易之易也、性、本然之性也、言本然之性、易而不難也　上善若水是也

一説、易、変易之義也、性、気質之性也、変易気質之性、而復本然之性也、所謂上善若水者、

挙水而諭教愚人也

*疏老君挙水為喩、以勧修道之人、欲令體七善三能、修身理國、兼以不銷之德、故無尤過之

支

○上善若水　注上善之人如水之性也

義曰、上善之士、體道修心、應変随時、縦横利物、老君欲顕上善之德、以勧後学之人、以

水与道相隣故挙水為喩、上善有善而忘其善、如水之不矜其功、水不矜功、其功益大、善不伐

善、其善益彰、既大且彰、為善之上矣、上惟南面之主、下洎栖巖之人、能如水焉必得道矣

○水善利萬物　注水在天為霧露在地為泉源也

義曰、夫水之為德也、柔弱平和、居順處下、随時壅決、任器方圓、流作泉源、散作霧露、凡

物失之則死、得之則生、撃之無傷、執之無有、所以不及於道者水有形而道無形也、雖有形

為礙、其於利物之德謙冲之用、近於道矣

○而不争、處衆人之所悪　注衆人悪卑湿垢濁水、獨静流居之也

『38ウ

『39オ

義曰、甘者水之味也、涼者水之體也、水為氣母、王於北方、以潤下為德、其色黑、其性智、其味鹹、其數六、北方者、陽德之始陰氣之終也、生數一与道同也、道亦為一、即無一之一、水亦為一、即有一之一也、無一之一、為道之體、有一之一、為道之用、則明水者道之用也、一切物類、皆資潤澤而得生成以能潤、故而生万物、故處三能之首也

『39ウ

又曰、柔弱者、水之德也、德經第四十一章云、天下柔弱莫過於水、重挙水德以勧守柔矣、夫其水也居平則不流、法以平恕為本、故可取法也、水之不流、静能鑒物、故曰人莫鑒於流水、而鑒於止水、以其清且静也、水性、平也、故値不平則逝、値坎澤則止、東西南北随引所行、不与人争、無所不可校量衆德、又云、不及生物之功、故次二能也

又曰、人之性徇常者衆、謙順者寡、好居上位、悪處下流、唯夫水也處下不争、居汚不辱、比前之德、前德為勝、故為三能也

○故幾於道矣　注水性幾与道同也　廣聖義曰、幾近也

疏　去道不遐、故云近尓

○居善地　注水性善喜於地、在草木之上、即流而下　義無隠

有似於牝動而下人也　牝言女、人言男、水之性、如女之随男

○心善淵　深而明也　注水性空虚、淵深清明也

空虚清明如鏡之移物也

○與善仁　注万物得水以生、與虚不與盈也　義無隠　會平真通論曰、仁者兼愛、故人為仁、又荘

『40オ

子愛■レ人利レ物、謂二之仁一

○言善レ信　注水内レ影照レ形、不レ失二其情一也

言、流水有声之謂　雖流水震動而成響、移物内其影照其形、方*方物、■■圓■圓物、而不失己之*其情也　如レ火是外レ影而照二其形一也、外レ影而照者、其形不二分一明一

○政善レ治　會去敬、釈名曰、政正也、下所取正、左傳杜一預曰、在レ君為レ政、在レ臣為レ支、又大曰レ政小曰レ支

注無レ有レ不二洗一清且平一也　水之於レ物、洗二清垢一濁一、而己平一直也、傾則不レ止

○支善レ能　支之義解二於前一　能會平蒸、増一韻勝一任也

注能一方能一圓、曲一直随レ形也　不二一一般一者善能也

○動　善レ時　注夏散冬凝、應レ期而動、不レ失二天時一也

水之於レ時、炎一天則散而為二急一雨一、寒一天則凝而為二堅一氷一、能應二其期一、而動一揺者、不レ失二天時一也

居善地以一下七一善也

○夫一唯不レ争　注壅レ之則止決レ之則流聽一從二人一也

夫一唯之字有レ力、雖二幾一度一不レ争

○故無レ尤　注水性如レ是、故天一下無レ有二怨一尤水者上也

於レ是皈二上一善若レ水四一字一、可レ會二一一章之大一意一

義曰、不レ争之德、々之先也、凡人之性不レ能レ無レ争、為レ争之者、其支衆也、乱一逆必一争、暴一慢必一争、忿一恚必争、奢一泰必一争、矜一伐必争、勝一尚必争、違一愎必争、進一取必争、勇一怯必争、愛一悪必争、專一恣必

40ウ　41オ

争、寵嬖必争、王者有一於此、則興師海内、諸侯有一於此、則兵交其國、卿大夫有一於此、則賊乱其家、士庶人有一於此、則害成於身、皆起於無思慮徳礼法、不畏懼不容忍争乃興焉、故争城者殺人盈城、争地者殺人盈[illegible]野、必當察起争之本、塞為争之源、無不理矣

又曰、體茲七善、遵彼三能、國泰長生之要也

（以下余白）

『41ウ

運夷第九　會去問、運、説文迄徙也

會平支、夷、平也、五運平夷之義也

○持而盈之、不如其已　注盈満也已止也持満必傾不如止也

義曰、持盈之喩、凡有四義、一者堅持欲心、至於盈満、二者保持世財、至於盈満、三者執持悪行、至於盈満、四者持権恃禄、至於盈満、大凡知進忘退、不念善道、執滞不廻、以至盈満者、皆當有報、欲心盈満者得羸疾傷生報、世財盈満者得攻刼侵奪報、悪行盈満者、得刑厄残害報、権禄盈満者、得傾覆淪滅報、所以老子戒之不如休止、不休不止、斯報必験』42オ

○揣而鋭之、不可長保　會去霽　鋭利也

無源章曰、挫其鋭　注鋭進也、言平治之後更欲進取功名、則其身傾覆也

注揣治也先揣之後必棄捐也　當暴乱之時先揣之、而後可必棄捐之義也、不棄捐之則殃及其身也

*義曰、夫王者鋭於開疆拓土、則人怨國亡、人臣鋭貪利圖名、即身危禍及

○金玉満堂、莫之能守　會平陽、堂、殿也

注嗜欲傷神財多累身也　胸中嗜欲多則傷神、身外貨財多則累身

疏曰假使貪求不已、適令下金玉満上堂象既有歯而焚其身、鷄亦為犧而断其尾、且失不貪之寶坐貽致寇之憂以其賈害此覆釋持盈也

義曰、象有歯而焚身者、春秋襄公廿四年、晋范宣子為政、諸侯之幣重、鄭人病之、二月鄭伯如晋、*子産寓書於子西以告宣子、曰子為晋國、四隣諸侯、不聞令德、而聞重幣、僑也惑之、僑聞君子長國家者、非無賄之患、而無令名之難、夫諸侯之賄、聚於公室、則諸侯貳、左傳注、已下同貳、離也、私僕加之、若吾子頼之、則晋國貳、注、頼、恃用之諸侯貳則晋國壊、晋國貳、則子之家壊、何没々也、注没々、沈滅之言將焉用財、夫令名德之輿也、注德、須令名以遠聞、德、國家之基也、有基無壊、無亦是務乎、有德則樂、々則能久、詩云、樂只君子、邦家之基、有令德也夫、注詩小雅言君子樂美其道、為邦家之基、所以済令德、恕思以明德、則令名載而行之、是以遠至迩安、毋寧使人謂子、々實生我、而謂子浚我以生乎、注浚、取也、言取我財以自生　象有歯焚其身、賄也　注、焚、斃也宣子◇、乃輕幣、是行也鄭伯朝晋、為重幣故也、鷄断尾者、春秋周景王子朝之傅賓孟適郊見雄鷄自断其尾、嘆曰、犧牲之用、存乎全而肥碩、今自断其尾、使己不全、冀免為犧之用、鷄之保其身也如此、況於人乎、貪利而忘其身、志不及鷄矣、不貪之寶者、鄭人有得玉獻於子罕、曰此寶也、将獻之、子罕曰、汝以玉為寶、我以不貪為寶、我若取玉俱喪寶矣、不如両

42ウ

43オ

全レ之、遂不レ受レ玉、致レ寇者、易解卦六三詞曰、負且乗致寇至、負者、小人之戔也、負擔於物合是小人乗者君子之器也、今小人捨負擔而乗車、是小人而乗君子之器矣、故竊盗之人、思レ奪レ之矣

左傳昭公二十二年曰、王子朝賓起有レ寵於景王、注子朝、景王之長庶子、賓起子朝之傅

王與賓孟説之欲レ立レ之、注孟即起也王語賓孟、欲立子朝為太子劉獻公之庶子伯蚡亥単穆公、注獻公劉摯、伯蚡劉狄、穆公単旗悪賓孟之為人也願レ殺之、又悪王子朝之言以為乱願レ去之、注子朝有欲レ位之言、故劉蚡悪之賓孟適レ郊見雄雞自断其尾、問之侍者、曰自憚其犧也、注畏其為犧牲奉宗廟、故自残毀■■■

以長守レ貴也

○功成名遂身退、天之道

注言人所レ為功成立名跡称遂、不退レ身避レ位、則遇於害、此乃天之常道也、譬如日中則移、月満則虧、物盛則衰、樂極則衰也　義無レ隠　『44ウ

義曰、禦レ災除レ患曰レ功、冨貴尊栄曰レ名、功既成矣名既遂矣、而不レ知レ退者、鮮レ不レ及レ禍、夫何故哉、寵則有レ辱、盛則有レ衰、元極則悔、高鳥尽而良弓蔵、狡兎死而猟犬烹、勢使レ然也、范蠡扁舟而脱レ禍、夫種固レ位而喪レ身、此之謂矣

或問曰、功成名遂者必可身退否、曰必退、不レ得其道而退者、非レ退也、貽咎於身、則禍何避山林、得其道而不レ退者退也、積徳於身、則禍何及市朝、又問得其道而不レ退者、其行如何、曰孝経云、在レ上不レ驕、高而不レ危、制レ節謹レ度、満而不レ溢、又問言必退者何哉、曰有不足則非レ成非レ遂問者唯而退　『45オ

（以下余白）

（半葉余白）

能為第十　能為者、能為無為之謂　『45ウ

經曰、天門開闔能為雌乎

○載營魄　會去隊、載、舟車運物也、淮南子曰、天氣為魂、地氣為魄　白虎通曰、魂者沄也、猶沄沄行不休也、魄者迫也、猶迫迫著於人沄、水轉流兒、迫、逼也、附也　又入陌魂者、神也、陽也、氣也、魄者、精也、陰也、形也、魂氣皈於天、體魄復于地

注營魄魄也　會平庚回旋曰營、回旋、魂之義也、運氣論曰、天高寥廓、六氣回旋、以成於四時、地厚幽深、五行生化、以成於万物、可謂無窮

人載魂魄之上得以生　當愛養之　人載魂魄之上、如以物載舟車之上、愛養舟車而載之、則舟車不損、而物亦不傷、不愛養而載之、則舟車損而物亦傷

義曰、西昇經云、身者、神之車也

喜怒亡魂、卒驚傷魄、魂在肝、魄在肺、美酒甘肴、腐人肝肺　是不知載魂魄之謂　廣聖義

注曰、*[illegible]魄則陰虛、魂則陽滿、[illegible]義曰、虛魄者陰氣有象、人之形也、陽氣無形、人之神也、形之具而陽氣未附、則塊然無知、如頑石枯木、陽氣既降、即能運動、故以形為魄

喜則不覚而尽気、怒則強而尽気、魂者*陽滿也、故於[illegible]喜怒失魂、魄者陰虛也、人當安閑之時、卒驚則失魂也

故魂静　志道不乱、魄安修德延年也　是載魂魄之謂　義無隱

46オ

○抱レ一能無レ離乎　是載二得魂一魄二之謂、何為魂一静魄一安乎、抱レ一能無レ離而一已

注言人一能抱レ一、使*不レ離二於身一、則長存也、一者、道始所レ生、太一和之精■一気也、故曰一布二名於天一下一

太一和精一気者、天一地和一合、而生二万一物一之謂

天得レ一以清、地得レ一以寧、侯一王得レ一以為二正一平一　法本第三十九曰、昔之得レ一者、天得レ一以清、地得レ一

以寧、神得レ一以霊、谷得レ一以盈、万一物得レ一以生、侯一王得レ一為二天一下正一、其致レ之

天不レ得レ一不二以清一明一、地不レ得レ一不二以安一寧一、侯王不レ得レ一不二以正一平一、天之清一明、地之安一寧、侯王之

正一平、皆起二於道一而已

侯、諸侯、王、天下之王

入為レ心出為レ行、布一施為レ徳、惣一名為レ一、一之為レ言、至一一無一二也　義無隠

○専レ氣致レ柔　専、廣一韻、自一足也、増一韻、純一篤也、謂下不三散二乱精一気一、充二満一一身一、則其身不二剛一強一、致中

柔一順上也

注専二精一気一使レ不レ乱、則形一體能應レ物、而柔一順也

疏曰、*専、専一也、気、冲一和妙一気也、人之受レ生、冲一和為レ本、若染二雑一塵一境一、則冲一気離一散神不

レ固レ身故戒令二専一冲一和一使レ致二柔弱一能如二嬰一児一無レ所二耽一著一、此教レ養レ気也

○能如二嬰一児一乎

注能如二嬰一児一、内無二思一慮一、外無二政一支一、則精一神不レ去也

内者、言レ心、外者、言二身之所一レ行也

46ウ

47オ

義曰、守道之士、當如嬰児無染雑思慮、使神不離身、西昇経曰、哀人不如哀身、々々不如愛神、々々不如含神、々々不如守真、又曰、神愛人、々不愛神、是以老君教人養神養気也

○滌除玄覧

注當洗其心使潔清也、心居玄冥之[redacted]處、覧知万亥、故謂之玄覧也　玄冥之處

『47ウ

○能無疵乎

注不滛邪也

廣聖義注曰、玄覧、心照也、疵、瑕病也、滌除心照、使令清浄、能無疵病乎、疏曰、滌者、洗也、除、理也、義曰、心之照也、通貫有無、周遍天地、因機即運、隨境即馳、不以澄静制之、則動淪染欲、既滞染欲、則万悪生焉、万悪生、則疵病作焉、老君戒令洗滌除理、翦去欲心、々照清浄、則無疵病、西昇経曰、生我者神、殺我者心、故制志意、還思慮者、謂教人修心也

○愛民治國

注、治身者愛気、則身全、治國者愛民、則國安也

愛者、愛惜也、先言治身者、興治國者、下注同矣

○能無知乎

『48オ

注治身者、呼吸精気、無令耳聞也、治國者、布徳施惠、無令下知也　呼吸亦愛惜之義也、見于下注

無令下知者、不為己功之謂

疏曰、愛民者、使之不暴卒、役之不傷性、理國者、務農而重穀、支簡而不煩、人安其生、不言而化矣

○天門開闔

注天門、謂北極紫宮、開闔、謂終始五際也

論語正義曰、案尓雅釋文曰、北極、謂之北辰、郭璞曰、北極、天之中以正四時、然則極中也、辰、時也、以其居天之中、故曰北極、以正四時、故曰北辰、漢書天文志曰、中宮、太極星其一、明者泰一之常居也、旁三星、三公環之、匡衛十二星、藩臣、皆曰紫宮

漢書翼奉傳曰、臣聞之於師曰、天地設位、縣日月、布星辰、分陰陽、列五行、以視聖人名之曰道、聖人見道、然後知王治之象、故畫州土、建君臣、立律■歴、■陳成敗以視、賢者名之曰經、賢者見經、然後知人道之務、則詩、書、易、春秋礼楽是也、易有陰陽、詩有五際

注應劭曰、君臣、父子、兄弟、夫婦、朋友也、孟康曰、詩内傳曰、五際、卯、酉、午、戌、亥也、陰陽終始、際會之歳、於此則有変改之政也　春秋有災異、皆列終始、推得失、考天心、以言王道之安危

』48ウ

（以下余白）

天門、謂鼻孔開、謂喘息闔、謂呼吸也　上先言天、而此言人、上文傍、而此文正也

『49オ

○能為雌乎

注治身、當如雌牝安静柔弱、治國、當如應変和而不唱也　雌、陰鳥也、牝、陰獣也、義無隠

應、相應也、変、変化也、唱、導也、先也、言相應四時之変化、而和以不於支争先之謂

○明白四達

注言道明白、如日月四通満於天下八極之外　韻府入職■八極、方隅極處　道明白、得道之明白也

義曰、明白、恵照也、恵照之心照無遠近、煥然四達、所無隔遠

故曰、視之不見、聴之不聞、彰布之於十方煥々煌々也

『49ウ

賛元第十四章曰、視之不見名曰夷、聴之不聞名曰希、搏之不得名曰微、此三者不可致詰、此文係

下所謂能無知乎之句　會去翰、煥、明也、廣韻、文彩明皃、會平陽、説文、煌々、煇也、此文係於

明白四達之句

○能無知乎

注無有能知道満於天下者也　義無隠

義曰、人君負独見之明以御四海、其政察察民凋弊矣、老君戒令忘功息昭、亦猶塞耳以閉其聰、冕旒垂目以杜其明也

○生之畜之　注道生万物而畜養也　義無隠

○生而不有　注道生万物無所取有也　義無隠

○為而不恃　注道所施為不恃其報也　義無隠

○長而不宰　注道長養万物、不宰割以為器用也

宰割、分裂之義

器用、従大小長短、而用成之義

『50オ』

○是謂玄徳

注言道行徳玄冥不可得見、欲使人如道也

『50ウ』

（以下余白）

（一葉余白）

〈この間、倭名類聚抄の一条及び三才圖會車之條下の「車制之圖」を移写せる別紙一枚*が綴じ込まる〉

『51ウ』

無用第十一　用、在無用而無尽之謂

經曰、有之以為利無之以為用

○三十輻共一轂

注古者車三十輻、法月數也、共一轂者、轂中有孔、故衆輻湊之

會平魚、車、輿輪總称、古史考曰、黄帝作車、引重致遠、少昊時加牛、禹時奚仲加馬

周禮冬官考工記曰、車有六畫之數　注車有天地之象、人在其中焉、六等之數、法易之三材六畫、疏車有天地之象者、下文云、軫之方也以象地、蓋之圓也以象天、是車有天地之象也、云人在其中焉者、在車蓋之中也、云三六等之數、法易之三材六畫者、易説卦云、立天之道、曰陰与陽、立地之道、曰柔与剛、立人之道、曰仁与義、兼三材而両之、故易六畫而成卦、兼三材者、天有陰陽、地有柔剛、人有仁義、三材六畫、一材兼二畫、故車之六等之法也　私云、

52オ

軫、戈、殳、戟、矛、加人而六等也、軫、輿後横木、戈、殳、戟、矛、皆劒戟也

又曰、輻也者以為直指也

又曰、軫之方也、象地也、蓋之圜也、以象天也、輪輻三十、以象日月也

會入屋説文、轂、輻所湊也、老子曰、三十輻共一轂、々者居輪之正中而為輻之所湊

治身者、當除情去欲使中五臓空虚、神乃皈之也、治國者、寡能惣衆、弱共扶強也

寡、上一人也、衆下万人也、扶強、扶成強也

老君引而不發、河公已發之

『52ウ

○當其無有車之用

注無、謂空虛也、轂中空虛、輪得轉行、舉中空虛、人得載其上

會平真説文、有輻曰輪、無輻曰輇　又平魚説文、輿、車底也

漢書輿服志曰、上古聖人、見轉蓬始知為輪、々行可載、因物知生、復為之輿、々輪相乘、流運罔極任重致遠、天下獲其利

疏曰、輻三十貫於一轂、明少者多之所宗也、當其虛無、方有車之運用、明無者有之所利也

○埏以為器

注埏、和也、埴、土也、和土以為飲食之器　義無隱

○當其無有器之用

注器中空虛、故得有所盛受也

疏曰、範和粘土、燒成瓦器、亦取其中空虛、以用盛受物也

義曰、和土為器、亦彰因有而用無、凡曰器用、其形万殊、大小不同、方圓各異、或巧、或拙、或賤、或珍、而所用皆用器中空無之處尓

『53オ

○鑿戶牖以為室　注謂作室屋也

○當其無有室之用　注言戶牖空虛、人以得出入観視、室中空虛、人得以居處、是其用也

會上廙説一文、戸、護也、半一門為レ戸、又外曰レ門、内曰レ戸

上宥穿レ壁以レ木為二交一窓一也

疏曰、鑿、穿也、門傍一窓謂二之牖一、古一者穴一居、故詩云、陶一復陶一穴、謂穿二鑿穴一中之土一、以復覆其上一、故云レ鑿尓、後一代聖一人易レ之以二宮一室一、取二其室一中空一虚一、所以人得二居一處一

53ウ

○故有之以為レ利　有、万一物也、為レ利、得二其宜一也

注物利二於形一、器中有レ物、室中有レ人、恐二其屋之破一壊一、腹中有レ神、畏二形之消一亡一也　物利二於形一者、万一物各愛二其形一之義也　形者、神之室也、故畏二消一亡一也

○無之以為レ用　注言虚一無者、乃可レ用二盛一受物一也、故曰虚一無能制二有一形一、道者空也

義曰、夫道之無也、資レ有以彰二其功一、無二此有一則道功不レ彰矣、物之有也、資レ道以禀二其質一、無二此道一則物不レ生、物非レ道不レ能二生一成一、道非レ物不レ顕二功一用一、亦猶二車器室三者一、皆取二其因一無以利レ有、因レ有以用一レ無也

又曰、顕二道之用一、以形二於物一、々禀二有一質一、故謂二之器一、々者有一形之類也、聖一人法二道之用一、制以為レ器、畫レ卦観レ象、制以二文一字一、刳レ木為レ舟、剡レ木為レ檝、断レ木為レ杵、掘レ地為レ臼、弦レ木為レ弧、剡レ木為レ矢、制為二宮一室一、結為二網一罟一、服レ牛乗レ馬、負レ重致レ遠、鋳レ金為レ兵、掲レ竿為レ旗、劉レ木為レ耜、揉レ木為レ耒、一一支以一上以利二天一下一、此皆分二道之用一以為二器一物一尓、皆易繫所レ称、此乃道是無体之名、形是

54オ

有質之用、凡万物従レ無而生、衆形由レ道而立、先レ道而後レ形、道在二形之上一、形在二道之下一、故自形而上、謂二之道一、自形而下、謂二之器一

（以下余白）

』54ウ

検欲第十二　會上琰、検、束也、言検二束貪欲一也、検束、倹約不レ恣之謂、

經曰、為腹不為目

○五色令下二人目一盲上　五色、蒼、赤、黄、白、黒也、蒼、木色、春也、赤、火色、夏也、黄、土色、土用也、白、金色、秋也、黒、水色、冬也、盲　會平庚説文、目無二牟子一、目珠子謂二之眸一

注貪滛好レ色、則傷レ精失レ明也　貪滛者、欲レ物太過之義　好レ色者、太愛二五色一之義　傷レ精者、毀二傷精一神一也、失レ明者、損二失清明一也

義曰、目不レ見二五色一、謂二之盲一、五色之設、本以レ彰二五行之象一、別二尊卑之飾一、翫而滞レ之、匪二目盲一乎

○五音令下二人耳一聾上　五音、角、徵、宮、商、羽也、角、木音、春也、双調徵、火音、夏也、黄鐘宮、土音、土用也、一越商、金音、秋也、平調羽、水音、冬也、盤渉

聾　會平東説文、聾、無レ聞、釈名籠也、如下在二蒙籠之内一不上レ可レ察

注好レ聴二五音一則和気去レ心不レ能レ聴二無声之声一

55オ

和ニ気中ニ和之気也

義曰、耳不レ聞二五ニ声一、謂二之聾一、五ニ声之設、本以レ通二天ニ地之気一、彰二五ニ行之声一、悦而滞レ之、不レ曰レ聾乎

○五ニ味令二人口一爽上 五ニ味、酸、苦、■*甘、辛、鹹也、酸、木ニ味、春也、苦、火ニ味、夏也、甘、土ニ味、土ニ用也、辛、金ニ味、秋也、鹹、水ニ味、冬也

注爽、妄也、人嗜二於五ニ味一、則口ニ妄言失二於道一也

爽 會上養、爽、差也 嗜、過レ中之謂、口妄者、不レ知二正ニ味一也、言失二於道一者、如二以レ甘成レ苦、以レ苦成上レ甘之謂

義曰、口不レ辯二五ニ味一、謂二之爽一、五ニ味之設、本以レ調二五行之和一、以養二於人一、美而耽レ之不レ曰レ爽乎

又曰、夫目悦二妖ニ麗之色一、耳耽二鄭ニ衛之声一、口嗜二珍ニ鮮之味一、則心有二滞ニ著不ニ通一、而流ニ遁忘レ返

僕按、五ニ色五ニ音五ニ味之注、於二五ニ色注一、不レ言レ不レ能レ見二無ニ色之色一、於二五ニ味注一、不レ言レ不レ能レ辯二無ニ味之味一、於二中五ニ声注一、独言レ不レ能レ聴二無ニ声之■声一者何哉、匪二啻執レ中而畧二上ニ下一、太有二意ニ味一、上注言レ失レ明、下注言レ失二於道一、所レ謂無ニ声之声、非下於二無ニ声之地一別有二真ニ声一而聴上レ焉、無ニ色之色、非下於二無ニ色之地一別有二真ニ色一而見上焉、無*ニ味之味、非下於二無ニ味之地一別有二真ニ味一而辯上レ焉、以下五ニ味得レ中、而無二過不及一者上、為二無ニ味之味一也、嘗者以三得レ中而無二過*不及一為レ辯二無ニ味之味一、以三五ニ音得レ中而無二過ニ不及一者上、為二無ニ声之声一也、聴ニ者以三得レ中而無二過ニ不ニ及一■*為レ聴二無ニ声之声一、以下五ニ色得レ中而無二過ニ不ニ及一者上、為二無ニ色之色一也、見者以三得レ中而無二過ニ不ニ及一、■*為レ見二無ニ色之色一、言三別有二真ニ色真ニ声真ニ味一者、

55ウ

56オ

即是釈氏之徒也、剰言以目而听以耳而見、於儒門論之、不言無声之声、無色之色、無味之味、而言■■■■■■■五味之和、五色之和、五声之和而已

○馳騁田猟、令人心発狂　白虎通曰、田猟、四時之田物名

注人精神好安静、馳騁呼吸、精神散亡、故発狂也

會平支説文、馳、大驅也、増韻、疾驅也　會上梗説文騁、直馳也、廣韻、馳騁走也　會平虞出息為呼入息為吸　馳騁呼吸者、於田猟過中之謂

義曰、畋猟者、國之正禮也、時而行之、則為禮、不時而溺之、則為乱、亦猶人之四支百體屈伸動静、得其宜、則合於禮、違之則為狂矣、禮、天子諸侯毎歳三畋、一為乾豆、祭祀宗廟也、二為賓客、交二國之好也、三充君之庖、食以時也、時而不畋則曰不敬、畋不以時、則謂之暴、所以春蒐夏苗秋獮冬狩、皆伺農隙、以講武戎也、獺未祭魚、網■罟不施於川、豺未祭獣、置罘不通於野、鷹隼未擊、罻羅不張於林、修祭禽之禮、展三驅之仁、順天時也

又曰、外作禽荒、暴物犯時、十旬不返、馳騁莫已、遂為発狂、人怨國危、失禮致禍也、況人之欲心、馳騁逐境争奔、外溺色声、内傷神気、発狂於身乎

○難得之貨令人行妨

注妨、傷也、難得之貨、謂金銀珠玉、心貪意欲、不知厭足、則行傷身辱也

會去箇、鄭康成曰、金玉曰貨、布帛曰賄、泉穀曰財

義曰、材器者、性分之貨也、珠珎者、世間之貨也、性分所無之貨、矯竊即行傷珠珎、難得之貨、貪求則身辱、所宜任其性分、守彼天常矣、人君貪求珎異、則下怨民殘、理身貪求珎異、則行傷身辱、是乖失天倪也、天倪者、天然之分也

○是以聖人為腹

注守五性、去六情、節志気、養神明也

五性者、五行之性也、六情者、喜、怒、哀、樂、愛、悪也、志気者、志、心之所之也、気、気質之気也、節、操也、又制也、神明者、天理之在我也

○不為目　注目不妄視泄精於外也

義曰、不為目者、以其妄見妄視、滞於色塵、傷性■乖和、聖人不取、為腹者、懐質樸、抱忠信、飡元和、薄滋味、可以致道、可以化民、聖人為之

○故去彼取此　注去彼目之妄視、取此腹之養性也

義曰、腹者、容受而無情、故取之、目者、觸見而有欲、故去之

（以下余白）

57オ

57ウ

（裏面余白）

『58オ

厭恥第十三　會平鹽説文、厭、飽也、通作厭

『58ウ

恥、恥辱也、厭恥者、厭去恥辱之義也

經曰、及吾無■身吾*有何患乎

○寵辱若驚

注身寵亦驚、身辱亦驚　寵、寵栄也、辱、汚辱也、又曰、寵、愛也、人愛我之義、辱、悪也、人悪我之義

廣聖義注曰、操之則慄、捨之則悲、未忘寵辱、故須驚

義曰、聖人睿鑑、得喪混同、尚以死生為一條、豈復寵栄而辱懼、故戒之曰、得寵亦驚、此則寵辱斉一得喪混同也、所以言驚者、寵為辱本、安得無驚

○貴大患若身

『59オ

注貴、畏也、若、至也、畏大患至身、故皆驚也

大患者何哉、亡身也、寵■是大患之■兆、辱是大患之漸至也、以寵辱而即為一箇之大患也、以寵辱、而即為一箇之大患者何哉、合抱之木、生於毫末、大層之臺、起於累土

○何謂寵辱　注問何謂寵何謂辱、寵者尊栄、■辱者恥及身、還自問者、以暁人也

○寵為上　注寵為尊栄也

○辱為下　注辱為下賤也

義曰、老君恐人未暁前義、挙問欲以重明、既立問者之詞、乃為対荅之理云

○得之若驚　注得寵栄驚者、*7處高位如臨危也、貴不敢驕、富不敢奢也

■*■■■

有レ身者、非三暫有二此身一也、但貪レ世之人、能私二其身一也　廣韻曰、坐、被レ罪也

安樂時也、勤労又時也、富貴時也、飢寒又時也、何憂二其勤労一、念二其飢寒一、而觸二妄情一、従二貪欲一、可レ遇二禍患一乎、中庸曰、君子素二其位一而行、不レ願二乎其外一、素二富貴一行二乎富貴一、素二貧賤一行二乎貧賤一、素二夷狄一行二乎夷狄一、素二患難一行二乎患難一、君子無三入而不二自得一焉

○及二吾無一レ身吾有二何患一乎

注使下吾無レ身體二道自然一、輕挙昇レ雲出二入無間一、與レ道通上レ神、當レ有二何患一也

義曰、無レ身者、非三頓無二此身一也、但修レ道之士、能忘二其身一尓、荘子曰、適来者夫子時也、時自生耳、適去者夫子順也、理當レ死耳、安レ時處レ順、憂樂不レ入、此達人之忘レ身也

體二道自然一、體者、法之義也、輕挙昇レ雲出二入無間一者、道与レ我通レ神、而合一体、則於レ理無レ不二透徹一之謂、入レ水亦不レ溺、入レ火亦不レ焦

○故貴　以レ身為二天下一者、則可三以寄二於天下一矣

注言人君自貴二其身一而賤レ人、欲レ為二天下主一、則可二寄立一、不レ可二以久一以二天下一不レ為二天下之天下一、為二一人之天下一之謂

寄立者、不二安居一之謂、會去賓、寄附也、蘓氏瞻詩曰、吾生如レ寄耳

○愛以レ身為二天下一者、乃可三以託二於天下一矣

60ウ

61オ

注言人君能愛其身非為己也、乃欲為*万民之父母、以此德為天下主者、乃可以託其身於万民之上、長無咎也

（以下余白）

『61ウ

贊玄第十四　廣韻曰、讚、称人之美、

贊玄者、贊美玄妙之理也

○視之不見名曰夷　注無色曰夷、言無彩色、不可得視而見之也

○聽之不聞名曰希　注無声曰希、言無音声、不可得聽而聞之也

羽、声也、絲、竹、金、石、匏、土、草、木、音也、詩序声成文謂之音、　會平侵、宮、商、角、徵、

出曰声　礼記月令疏、雜比曰音単

○搏之不得名曰微　注無形曰微、言無形體、不可搏持而得之也

疏曰、夫視之者、以色求道、聽之者、以声求道、搏之者、以形求道、々非色声形法、故求竟不得、以不得故欲謂之無、乃於無色之中、能應衆色、無声之中、能和衆声、無形之中、能状衆形、是有無色之色無声之声無形之形、故謂之希微夷者、所謂明道而非道也、夷者、平易也、希者声之微妙也、搏者、執持也

『62オ

義曰、以神視之、見無色之色、以気聽之、聞無声之声、以惠照之、識無形之形、而衆色之具、

衆声之和、衆形之立、非道不能生、非道不能成、道也者獨能應衆色、和衆声、狀衆形、故強名之曰希夷微尓

○此三者不可致詰、注三者謂夷希微也、不可致詰者、夫無色、無声、無形、口不能言、書不能傳、當受之以静求之以神、不可強詰問而得之

先求之以神、而後受之以静也、神者言無心無念也、静言無為無妄也

疏曰、詰、責也

『62ウ

○故混而為一　注混、合也、故合於三、名之為一也

注所謂一者非道、々之所發出、万物之根元也、物之為物、不過色声形之三、道之於色、強名其気曰夷、道之於声、強名其気曰希、道之於形、強名其気曰微、故混合而言之、則一而已、此三者或為三才、或為三光、三才者、天地人、清浮之気為天、濁滓之気為地、中和之気為人、是三才也、三光者、日、*月、星辰、太陽之光為日、太陰之光為月、日月之餘光為星辰、是三光也

○其上不皦　注言在天上、不皦々光明也

○其下不昧　注言在天下、不昧々有所闇冥也

疏曰、皦、明也、昧、暗也、夫形質之物、皆有定方、在上者則明、在下者則昧、惟妙本恍惚、不可定名『*則在上亦不明、在下亦不暗、而能上、能下、能明、能昧、非天下之至賾、其孰能與於此乎

義曰、惟夫大道處於上不皎然而明、道非陽也、處於下不昧然而暗、道非陰也、天得道而能

63オ

清、是能上也、地得道而能寧、是能下也、陽得道而能動、是能明也、陰得道而能静、是能昧也

○繩々不可名　注繩々者動行無窮極也、不可名者、一非色也、不可以青、黄、赤、白、黒別上、一非声也、不可以宮、商、角、徴、羽聽上、一非形也、不可以長、短、大、小度上也

○復皈於無物　注物、質也、復當皈之於無實也

疏曰、繩々者、運動不絶之意、妙本生化、運動無窮、生物之功、強名不得、物々而不物、生生而不生、尋責不得、妙本湛然、未曾有物、故云復皈於無物

○是謂無狀之狀　注言一無形狀、而能為万物作形狀也　柳為緑、花為紅、松葉細、荷葉圓者、所謂形狀也

○無物之象　注言一無物質、而能為万物、設形象也　為柳、為花、為松、為荷者、物質也

○是謂忽恍　復皈於無物者、是謂無狀之狀無物之象也、呼無狀之狀無物之象、又是謂忽恍也

注言一忽々恍々、若存若亡、不可見也

義曰、道以生育動植成形、故能於無狀之中、成其形狀、無物之中作其物象、謂其無則也狀象資生、謂其有也則、杳冥難覩、非無非有、為惚恍焉

○隨之不見其後　注言一無影迹、不可得而隨也

○迎之不見其首　注一無端末、不可預待也、除情去欲、一自皈己也

義曰、至道獨立、無始無終、既非前後可窮、莫得隨迎之所、故曰長於上古、而不為老、

生於末代而不為少、先万物而不為始、後億劫而不為終、由此而言、豈隨迎而可得也、凡物有往則隨之、有来則迎之、道無来往、非隨迎可求矣

○執古之道、以御今之有　注聖人執守古道、主一以■御物、知今之當有一也

一無古今、々之一、即古之一也

義曰、御者、制也、古之化者無為無亥、今之化者有體有名、無為故易理、有體故難化

○能知古始、是謂道紀　注人能知上古本始有一、是謂道之綱紀也

會上紙、大曰綱、小曰紀、總之為綱、周之為紀

（以下余白）

顕德第十五　顕明道德之謂

○古之善為士者　注謂得道之君也

會平文説文、君、尊也、徐曰、君者、尹也、正也、長民之称、白虎通、君者、群也、群下之皈心也

會上紙説文、士、亥也、數始於一、終於十、孔子曰推一食十為士　善為士之士、非士大夫之士、加善字而作有道之称、有道之者、君人也、故言得道之君也

○微妙玄通　注玄、天也、言其志節微妙、精與天通也　志節、言其志有節而合道也

○深不可識　注道德深遠不可識知内視若盲、反聴若聾、莫知所長也　内視若盲者、見無色之

『64ウ

色、不レ見二五色之色一之謂、反レ聽若レ聾者、聽二無声之声一、不レ聽二五声之声一之謂

義曰、士者、指二古昔有道之人一也、有道之人、行レ道之行、凡有レ所レ立、在レ野、在レ朝、皆謂二之士一、刻レ意尚レ行、離レ世異レ俗、此山谷之士也、語二仁義忠信恭倹推讓一、此平世之士也、語二大功一、立二大名一、正二君臣一、明二上下一、此朝廷之士也、就二藪澤一、居二閑曠一、釣レ魚避レ世、此江海之士也、吹呴呼吸、吐レ故納レ新、熊經鳥伸、此導引之士也、若夫不レ刻レ意而高、無二仁義一而循、無二功名一而理、無二江海一而閑、不二導引一而壽者、為レ道之士也、前之五士、其用可レ測、其支可レ涯、唯為レ道之士、道德微妙、應レ変玄通、其用冲深、難二以智察一、無不レ無也、有不レ有也、澹然無極、而衆美從レ之、是不レ可レ識也

『65オ

○夫唯不レ可レ識、故強為レ之容　注謂二下句一也　以下五字之解也、以上五字、加二夫唯之字一、再言而曉レ人也、猶[illegible]*養身章言二功成不レ居夫唯不レ居　強為之容、雖レ非二言之可一及、強而為レ之形容也

○與兮若二冬涉一レ川　注挙レ支輒加二重慎一、與々兮若二冬涉一レ川、心難レ之也　與与レ豫通、疑難之義也

挙レ支者、言二即今所一レ行也　義曰、乱レ流而渡レ深曰レ厲浅曰レ揭、由レ膝以上曰レ涉

○猶兮若レ畏二四隣一　注其進退猶々拘制、若三人犯レ法畏二四隣知一レ之也　猶亦疑難之義　拘制者、於レ支不二容易一之謂

會去御、猶豫、獸名、性多レ疑、居二山中一、忽聞レ有レ声、則豫上レ樹、下止不レ一、故不レ決者言二猶豫一

義曰、猶豫皆疑難之象也、且常人不レ知レ修レ道、恣レ欲任レ情、無懼無疑、動貽二陷溺一、為レ道之士、知二愛欲一而不レ為、若冬將レ涉レ川有二凝冱之憂一、畏レ居將レ為レ支懼中隣里之聞知、既暗室不レ欺、每レ属レ垣

65ウ

為レ戒也、此為レ道之行也、夫人為二悪於幽一暗一者、鬼一神知レ之、為二過於明一顕一者、隣一里知レ之、得レ無二戒
慎一矣　66オ

○儼兮其若*レ客　注若下客因二主一人一■儼一然無上レ所二造一作一也　會
○渙兮若二氷之將一レ釋　注渙者解一散、釋者消一亡、除レ情去レ欲、日以空一虚也　會去翰説一文、渙、流一散也
義曰、儼、肅一敬也、渙、散也、釋、解也、出レ門如レ見二大一賓一、言二主之敬一レ客也、儼兮其若レ客、言二客之
敬一レ主也、賓一主尽レ敬、各慎二禮一容一、世之常也、至一人静一黙戒一慎換レ身、常如下對二主之恭一、固無中肆一情之
欲上、為レ善不レ滯、散一釋変一通、若レ泮二春一氷一、豈復膠一固矣
○敦兮其若*レ樸　注敦者質厚、樸者形未レ分、内守二精一神一、外無二彩一文一也　66ウ

疏曰、敦、々一厚也、樸、質一樸也、言雖下不レ滯二於物一、而絶中浮一競上、其徳厚、若二質一樸一、無レ所二分一別一
○曠兮其若レ谷　注曠者、寛一大、谷者、空一虚、不二有レ徳名一レ功、無レ所レ不二包一容一也
疏曰、曠、寛也、言善一士懐レ道抱レ徳、宇一量曠一然、寛一大於レ物、悉能含一受、如下彼空一谷無上レ不二包一容一
○渾兮其若レ濁　注渾者、守二本一真一、濁者、不二照一然一也、與レ衆合一同不二自一尊一也
會上阮、混一沌、陰一陽未一分、或作レ渾
疏曰、善一士心照二清一濁一、而能容レ物、和一光同一塵、不二自殊一異一、渾一然如レ濁、物莫二能一知一
○孰能濁以静レ之徐清*　注孰、誰也、誰能知二水之濁止、而静レ之、徐一々自一清一也　會平魚徐説一文徐安一

行也、増韻緩也』如濁者、道德之成者也、無心于濁、能濁者、修行底而未到*無心于濁也、

河公挙水而以譬之、水之濁也、水本不濁、物来而濁之、故静之以澄*則清也、脩行成就底人、如濁又不濁也

疏曰、因上文云若濁、便挙水之澄清、以況善士之心、無撓則自然静止、故云孰能於代間愛欲混*濁之中、而以清静道性静止之、令愛欲不起、亦如水之濁而澄、静之令徐々自清乎、孰、誰也

67オ

○孰能安以久*之徐生　注誰能安静以久徐々以長生也　雖暫得安静無以久、故不得徐々以長生也

○保此道者不欲盈　注保此徐生之道者、不欲奢泰盈溢也

廣聖義注曰、欲保此徐清徐生之道、當須無所執滞、若執清求生是謂盈満將大此道故云不欲盈尓』

67ウ

○夫唯不盈、故能弊不新成　注夫*唯不盈満之人、能守弊不為新成、弊者、匿光栄也、新成者、謂貴功名者也

守弊者、入無為也

義曰、既了舊法又證新法、謂自小乗入中乗道也、中乗之道、或権或實、滞於脩、又捨此権實有修之門、求入大乗無為之趣、執於修著、不悟無為、是日新還為盈満、故損之、又損階麁入妙矣

（以下余白）

（裏面余白）

『68オ

○皈根第十六　万物皆皈其根本之謂

『68ウ

○至虚極也　注道人捐情去欲五内清静至於虚極也　五内者、五蔵、虚極者、妙本之道也

義曰、稟道之性、本来清静、及生之後、漸染諸塵、障翳内心、迷失真道、六根者、一曰眼根、能見諸境、二曰耳根、能聞諸声、三曰意根、能生挙縁、四曰鼻根、能辯香臭、五曰舌根、能知諸味、六曰身根、能生煩悩、以此六種生諸罪、因展轉相生、障蔽真性、喩如草木結花吐実相生不窮、尋其所起、不離六種、如根生物、名曰六根、五欲者、眼欲諸色、耳欲諸声、鼻欲諸香、口欲諸味、心生衆欲、障蔽性情、煩悩縈纏、皆由此起、内心悦慕、謂之愛、外境著心、謂之染、因境生心、謂之欲、制止不已、謂之奔、意想交侵、謂之競■■■

69オ

■正性流散、隨念生邪、以生邪故乖失正本

○守静篤也　注守清静行篤厚也　守静厚者、至虚極也、静者、皈根曰静之静也

義曰、水流湿、火就燥者、易乾卦九五爻之詞也、言水火■二者也、無情之物而以形気相感、水流其地、先就於湿、火焚其物、先就於乾、無識無情、猶感應如此、況虚心静慮而不能致道乎、固可不求而道自至也

○万物並作　注作生也万物並生也

疏曰、此明守静篤致虚極之意、夫万物万形動作不同、其皈復常在於本

○吾以観其復　注言吾以観見万物、無不皆皈復其本、人當念重本也

義曰、物雖動作万殊、必復皈其本、人能虚心念道、々必集其虚、故戒令虚心念道也

○夫物芸々　注芸々華葉盛也　會平元、芸々、物多皃

○各復皈其根　注言万物無不枯落、各復反其根、而更生也　會入屋説文、復、往来也、廣韻、返也

易復卦曰、復其見天地之心乎、弼注、復者、反本之謂也、天地以本為心者也

義曰、芸々、茂盛皃也、百草衆木芸々茂盛、及其枯落則各皈其根、而更生茂盛動作也、皈根、復息也、物理皆然矣　疏曰、根者、本所受気而生也

○皈根曰静　注静謂根也、根安静柔弱謙卑處下、故不復死也　根者體、静者用也

○静曰復命　注言安静者是為復還　性命使[illegible]不死也　中庸曰、天命之謂性、集註、命、猶令也、性、即理也、天以陰陽五行、化生万物、気以成形而理亦賦焉、猶命令也、於是人物之生、因各得其所賦之理、以為健順五常之德、所謂性也

○復命曰常　注復命使不死、此乃道之所常行也

○知レ常曰レ明　注能知三道之所二常行一、則為レ明也　道之所二常行一、言二復一命使一レ不レ死也、明者、言レ知二復一命使レ不レ死之理一也

疏曰、守レ静復レ命、可レ謂有レ常、知レ守レ常者、更益レ明了

○不レ知レ常妄一作リニナスヲハ一凶　注不レ知三道之所二常行一、妄作二巧一詐一、則失二神一明一故凶也

義曰、常者、垂レ久不レ移之義也、天一地日一月得レ常而清一寧久照、人一君理レ國、得レ常而貞一正無一為、能守レ常則終一始不レ易、故常者道一德之紀也

70ウ

○知レ常曰レ容　注能知三道之所二常行一、則去二情一欲一無レ不二包一容一也　廣聖義注曰、知レ守二真常一、則如下彼空一谷無上レ不二含一容一

疏曰知レ常曰レ明、々則鑒レ物、々一来必應、無レ不二含一容一、故曰知レ常曰レ容

○容乃公　注無レ不二包一容一、則公一正無レ私、衆一邪莫レ當也

*會上賄乃継妄之辞

廣聖義注曰、含一容應レ物、々レ々無一心既無二私一邪一、故為二公一正一

○公乃王　注公一正無レ私則、可レ為二天一下王一、治レ身正則形一一、神一明千一万、共湊二己躬一也　會平陽説一文、王、天一下所二皈一往一也、董仲舒曰、古之造レ文者、三一畫而連二其中一、謂二之王一、三者、天一地一人也、而参一通之者、王也、孔一子曰、一貫レ三為レ王

義曰、知レ常順レ道、故能公一正而為レ王也、有一道之人、不レ言而自一化、不レ召而自一来、故天一下皈一往也、王

71オ

者、以物皈往為義

○王乃天　注能王、則德合神明、与天通也

廣聖義注曰、羣物樂推、如天之覆、則与天合德矣

○天乃道　注德与天通、則與道合同也

疏曰、惟天為大、惟王則之、其德同天、而無不覆、故曰王乃天、王德如天、則無為而理、道化乃行、故云天乃道

○道乃久　注与道合同、乃能長久也

廣聖義注曰、道行天下乃可以久享福祚矣

○歿身不殆　注能■公、能王、通天、合道、四者純備、道德弘遠、無殃無咎、乃與天地俱歿、不危殆也

疏曰、言守静、致虚、皈根、復命、如此可以為王、々德合天、乃能行道、々行乃久享福祚、天下之人、就之如日、戴之如天、澤之如雨、望之如春、故終歿其身、復何危殆之支、故曰歿身不殆

（以下余白）

（裏面余白）

72ウ　72オ　71ウ

淳風第十七　淳厚之風俗也

○太上下知有之　注太上、謂下上古無名號之君上也、下知有之者、下知上有君、而不臣亥之、質朴淳也

會平庚説文、名、自命也、去號號■■■■■名称

平文説文、君、尊也、長民之通称、白虎通云、君者群也、群下之所皈心也

平眞■■■説文、臣、牽也、亥君也、通論曰、心常牽於君也、孝經説、臣者、堅也、励志自堅固也

義曰、太者、大也、上者、高也、至高至大、以表其名、上古之君、無有諡號、行淳厚之化、以化於人、任物無為、不言而信、不施典法、以蕩物心、故臣下知其上有君、而不聞其教令、其臥居々、其起于々、其行塡々、其視顚々、山無蹊隧、澤無舟梁、耕而食、織而衣、四時自行、其上万物、自行其下、至德高遠、不可名称、故云太上、或云上古太古之君者、昔有容成氏、大庭氏、栢皇氏、中央氏、栗陸氏、麗連氏、軒轅氏、赫胥氏、無懐氏、昊英氏、尊盧氏、葛天氏、陰襄氏、祝融氏、列山氏、宓犧氏、神農氏、皆結縄無為之代、黄帝乃垂衣裳、造書契、有作有法、漸以化民矣、三皇者、以道理人、無制令無刑罰、謂之皇、有制令無刑罰、謂之帝、所以三古異、宜歩驟、斯変矣、太上之化、不其遠歟

○其次親之誉之　注其德可見、恩惠可称、故親愛而誉之也

疏曰、太上之君歿、黄帝堯舜氏作、施教行善、仁及百姓、故親之、柔服致平、功高天下、故誉之、親誉生前人之迹、矯徇為後代之患

義曰、誉、褒美也、矯、妄也、以身従物曰徇也、歿、死也、謂前太古上古之君相次死歿也、作、起也、神農徳衰蚩尤暴横、諸侯侵伐、黄帝修徳振兵、殺蚩尤於涿鹿之野、天下尊之立為天子、曰黄帝焉、以代神農之位、師廣成子於崆峒山、問理國之道、取天地之精、以養兆人、造書契、服牛、馬、舟、車、杵、臼、宮、室、弧、矢、調律呂、鑄鼎、制琴、禮樂既作、其臣大撓造暦、容成造算、倉頡造文字、風后造五兵、而万慮興焉、名迹顕焉、帝堯睦九族、親百姓、師務成子、定歳時、正律度、以化天下、帝舜師尹壽子、以孝徳彰聞、代堯為天子、黄帝堯舜制作法度、天下化之、民乃親其徳、而誉其功、乃真親真誉也、非黄帝堯舜使民親誉、而民自親誉之

『73ウ

○其次畏之　注設刑法以治之也　刑法者、五刑之法也、設五刑之法、而正罪之軽重也

孝経正義曰、孔安國云、割其額而涅之曰墨、刑、額、額也、謂刻額為瘡、以墨塞瘡孔令変色也、墨一名黥、又云截鼻曰劓、刖足曰剕、又云宮、淫刑也、男子割勢、婦人幽閉、次死之刑、又云大辟、死刑也、案此五刑之名、見於■経傳、唐虞以来皆有之矣、未知上古起自何時、

義曰、堯舜既歿、三王継之、三王者、夏殷周也、禹父鯀為堯治水、九年績用不成、舜殛鯀於羽山、挙禹代父使之治水、通九江、濬百川、百谷既同、四海無塞、手足胼胝、鑿竜門、闢

『74オ

伊闕、濬九河、所經者、七百餘國、乘四載、而奠名山大川、靡不周遍、其為人也、其仁可親、其言可信、声為律、身為度、舜遂禪位、禹既受位、自以德不及堯舜、去帝称王、即三王之一也、其後夏桀無道、殷湯以諸侯起兵伐桀而代其位焉、佐夏征葛伯有功、開三面之網、皈其仁者、三十六國、夏桀暴虐、天下叛之、湯征桀於鳴條之野、放之於南巢、三王之二也、其後殷紂無道、斮朝涉之脛、剖比干之心、置炮烙之刑、刳剔孕婦、天下叛之、周西伯以丁卯歳霸於邠岐、武王以己卯歳嗣位、至乙酉年伐紂於牧野克之、遂興周業而代殷而位焉、此三王之三也

74ウ

○其次侮之　注禁多令煩、不可皈誠、故欺侮之　禁者、禁制也、令、號令也

義曰、五霸者、在三王之内諸侯之間、以兵服四方、為盟會之主、内扶天子、外威諸侯、以禮楽征伐、権於當代、不及於王、故謂之霸、夏之霸者有昆吾、黄帝之後也、殷之霸者、有大彭豕韋、帝堯之後也、周之霸者、有斉桓僖公之庶子、名小白、晉文公者、献公之子、名重耳母曰狐姬

75オ

又曰、冲虚真經孔子對商太宰曰、三皇善因時順物、而理、五帝、善任仁義、彰善而成功、三王善任智勇、智以決之、勇以行之、五霸、善任機権、因勢以製宜、託機以成務、猶検之以禮、約之以信、禮信或虧、即霸道際矣

三畧曰、夫三皇無言而化、流四海、故天下無所皈功、帝者、体天則地、有言有令、而天下太平、君臣讓功、四海化行、百姓不知所以然、故使臣不待禮賞、有功美而無害、王者制

人以道降心服志、設矩備衰、四海會同、王職不廢、雖有甲兵之備、而無鬪戦之患、君無疑於臣、々無疑於主、國定主安、臣以義退、亦能美而無害、覇者制士以権、結士以信、使士以賞、信衰則士疏、賞虧則士不用命

『75ウ

○信不足焉　注君信不足於下也

○有不信焉　注下則應之以不信、而欺其君也

疏曰、此覆釋畏之侮之、百姓畏君之刑法、侮君之教令者、皆為君信不足於下、故令下有此不信之人尓

義曰、言著而不欺曰信、賞、及無功、罰、及無罪則為不信、教令失信、民得欺之矣、形曲則影斜、源混則流濁、上行下傚、其應若斯、春秋宣公十一年、楚子伐鄭、及楽、鄭大夫子良曰、楚晋不務德而兵争、與其来者可也、晋楚無信、我焉得有信、乃従楚、夏及楚子盟于辰陵、陳鄭服也、此乃信不足有不信焉

○猶兮其貴言　注説太上之君挙支、猶々貴重於言、恐離道失自然也

『76オ

疏曰、此覆釋親之誉之也、百姓所以親愛君之善仁、称誉君之功業者、由君有德教之言、故貴重君之言、而称誉之尓

注言説太上之君挙支者、其次親之誉之君也、太上之君不挙支、故挙支者、非太上之君、其次也、言太上者、德斉太上、而其支見而已、故言挙支也

○成レ功遂レ支　注謂二天下太平一也

○百姓皆謂　我自然　注百姓不レ知二君上之德厚一、反以為二自當一レ然也

疏曰、此覆釋太上下知也、夫淳樸不レ殘、孰為二犧樽一、道德公行、親譽焉設、故太上之代、下忘二帝力一、適令二功成支遂一、百姓以為二自然合一尓、不レ知二所以親譽報施一也

『76ウ

義曰、莊子馬蹄篇曰、淳樸不レ殘、孰為二犧樽一、白玉不毀、孰為二珪璋一、道德不レ廢、安取二仁義一、性情不レ離、安用二禮樂一、五色不レ乱、孰為二文采一、五声不レ乱、孰為二六律一、夫殘レ樸以為レ器、工之罪也、毀二道德一以為二仁義一、聖人過也、夫太古上古之時、大道之行、上德不レ德、人知二其上有一君長一焉、中古之時、大道既隠、仁德可レ見、恩惠及レ人、故有二親譽之美一焉、下古之衰、道德皆隠、教令欝興、信義漓薄、其上失レ信、下則以二不信一應レ之、故見二其峻令一則畏レ之、聞二其失一レ信則侮レ之、老君所レ戒、欲レ使二後代帝王一、弃二禮智之末跡一、慕二道德之古風一、遺レ功忘レ名、復中皈大樸上矣、親譽者、有二仁愛之跡一、則親レ之、有二美善之跡一則譽レ之、報施者、上加二其恩一曰レ報、下立二功労一曰レ施

『77オ

（裏面余白）

（以上第一冊）

『77ウ

# 校記

元表紙　当初は後補表紙の見返しに糊付けされていた。後に所蔵者の御配慮で元表紙が剝離され、そのゼロックスコピーを頂いて確認

1オ　「五」　もと「六」、墨で塗抹し、右旁に訂正加筆

「言」　本行脱、右旁に加筆

「所」　本行脱、右旁に加筆

1ウ　「廐」　道蔵本道徳經廣聖義「織」に作る

2オ　「子」　本行脱、右旁に加筆

「為」　本行脱、右旁に加筆補入

「師」　本行脱、右旁に加筆補入

「悼二惠王」　返り点「二」は誤写カ

2ウ　「者」　本行約三字分塗抹、右旁に加筆

「所」　本行「不」字の下に有り、移行符を以て訂正

3オ　「得二」　本行脱、右旁に加筆補入

「顯ノ」　送り仮名「ノ」、「メ」の譌カ

（體道第一）

4オ　道書全集原本、注文「里細」の間に「沙」字有り、本抄誤脱カ

5オ　「外二」　本行一字塗抹、右旁に加筆

6オ　「道二」　本行脱、右旁に加筆補入

6ウ　道書全集原本、鼻神、口神の間に「耳神」二字有り、本抄誤脱

道書全集原本、元真両字の間に「宮」字有り、本抄誤脱

7ウ　「有」　本行一字塗抹、右旁に加筆

「石一間カ上」　送り仮名「カ」、「ニ」の譌カ

8オ　「皆」　本行脱、右旁に加筆補入

8ウ　「故二」　本行脱、右旁に加筆補入

「性ノ」　本行一字塗抹、右旁に加筆

9ウ　「方圓」「長短」「剛柔」「強弱」各語、両字間に朱読点有り

10オ　「万物ノ」　もと「道ノ」、一字塗抹して、右下旁に加筆

「入」　本行一字塗抹、右旁に加筆

12ウ　「人」　本行脱、右旁に加筆

「為二」　本行脱、右旁に加筆補入

「有二」　本行一字塗抹、右旁に加筆

「無」　本行一字塗抹、右旁に加筆

13オ　「正ニ」　本行脱、右旁に加筆補入
「気稟之不レ同」　本行脱、眉上に加筆補入
13ウ　「陰一晦之」　本行約五字分塗抹し右旁に加筆
「値ニ」　本行脱、左旁に加筆補入
14ウ　「所」　本行脱、右旁に加筆補入
15オ　「性」　本行一字塗抹し右上旁に加筆
「雖」　送り仮名「トモ」の譌カ

（養身第二）

16オ　「者」　本行脱、右旁に加筆補入
「者」　本行脱、右旁に加筆補入
17オ　「空」　本行一字塗抹、右旁に加筆補入
17ウ　「能」　本行脱、右旁に加筆
「鳧之短」　本行脱、左旁に加筆
「卑」　本行一字塗抹、右旁に加筆
18オ　「上」　本行脱、右旁に加筆補入
「於」　本行一字塗抹、左旁に加筆補入
19ウ　「道」　本行脱、右旁に加筆補入
「望」　本行脱、右旁に加筆補入
20ウ　「徳」　本行一字塗抹、右旁に加筆

（安民第三）

22オ　「歆」　本行脱、右旁に加筆補入
23オ　「其レ気」　返り点「レ」は衍カ
「道ニ集」　返り点「ニ」は衍カ
23ウ　「於」　本行脱、右旁に加筆補入

（無源第四）

26オ　「澄」　本行脱、右房に加筆補入

（虚用第五）

28オ　「以ニ」　本行もと施に作る、塗抹し右房に加筆訂正
28ウ　「其レ封」　返り点「レ」は衍カ
「無レ使上ニ其首」　返り点「上」は「下」の譌カ
29オ　「故万一物自一生」　此の五字本行脱、右旁に加筆補入
29ウ　「虚」　もと送り仮名「ヲ」、加筆訂正
「曰」　本行脱、右旁に加筆
「裏」　「囊」字の譌カ

（成象第六）

32オ　「肝」　もと「肺」に作る、旁「市」に加墨して訂正
33ウ　「其鬼其所レ帰也」　此の六字本行脱、右房に加筆補入
「其」　右の補入文、此の字を脱す、右房に更に加筆補入

「陽」本行脱、右房に加筆補入

34ウ「于」本行脱、右房に加筆補入

35オ「水」火の譌カ

「土」本行一字塗抹、右に加筆

（韜光第七）

37オ「私云長無窮之義也久不朽之義也」此の十四字、眉上に加筆

「施」本行脱、右房に加筆補入

38オ「謚」本行一字塗抹、右旁に加筆

「此所謂」の下、道蔵本道徳真経廣聖義「失」字有り、本抄誤脱

38ウ「無二」本行脱、右房に加筆

（易性第八）

39オ「疏」道蔵本道徳真經廣聖義巻十、義曰下に見える

「上」本行脱、右旁に加筆補入

39ウ「涼」或いは深か、道蔵本道徳真經廣聖義「涼」に作る

「生三」本行脱、右旁に加筆

40ウ「空一虚清明如二鏡之移物也」この文河上公注には非ず、此の鈔本の体式の上からは、左旁の傍線は不用、書写者の過筆なり

「方」本行脱、右房に加筆補入

「之」本行脱、右房に加筆補入

（運夷第九）

42ウ「義曰」以下二十八字「殃及其身也」下の余白に小字以て追補加筆

43オ「子産」本行脱、右房に加筆補入

「◇」廣聖義「悦」に作る、この字左半虫損の為判読不能、「説」或いは「悦」か

43ウ「六一」本行塗抹、右房に加筆

44ウ「■」もと「疏」に作る、墨以て塗抹

45オ「非」本行一字塗抹、右旁に加筆

（能為第十）

46ウ「注」本行脱、右房に加筆補入

「■■■■」もと「魂則陽満」に作る、墨線以て抹消される

「者」本行脱、右房に加筆補入

47オ「使」本行脱、右房に加筆補入

47ウ「曰」本行脱、右房に加筆補入

48オ　「疵、」　本行一字塗抹、右旁に加筆

50オ　「満ヲ」　本行脱、右旁に加筆補入

別紙　料紙異なる　縦二一・六チン、別筆の如し

「轂　説文云、轂古禄反、漢語抄云車乃古之岐、俗云箇　輻所湊也　順和名」（和名類聚抄舟車部車具の一条）

三才圖會車制之圖は明版の臨写、輻、轂、輪の圖及び説明文を転写し、末に「右三才圖會車之條下」とある

（無用第十一）

52オ　「車ニ」　本行脱、右房に加筆補入

53オ　「レ有ヿヲ」　本行脱、右旁に加筆補入

「所ロ盛ニ受ルニ」　送り仮名「ロ」、もと「ヲ」、加筆訂正、又、もと盛字の左下に返り点「二」有り、墨筆を以て抹消さる

53ウ　「曰、」　本行脱、右旁に加筆補入

54オ　「室ノ」　本行脱、右旁に加筆補入

54ウ　「為」　本行脱、右旁に加筆補入

（検欲第十二）

55ウ　「■」　もと「辛」字有り、墨筆を以て抹消

56オ　「有ニ」　もと返り点「中」有り、墨筆以て抹消

「無一」　本行一字塗抹、右旁に加筆

「過」　本行脱、右旁に加筆

「以三得テレ中而無二過不及一為」　返り点「一」「三」、もと「上」「下」、墨筆を以て訂正

「■」　もと「者」、墨を以て塗抹

56ウ　「■」　もと「見」字有り、墨を以て抹消

「■■■■■■■」　もと「無味之味無色之」の七字有り、墨線を以て抹消さる

57オ　「二為ニ賓ニ客ノ一、交ルノ二國ニ之好ナリ也」　読点もと交字の下に有り、今、私に訂正

「■」　もと「古」字、墨筆を以て塗抹

（厭耻第十三）

59オ　「吾」　本行脱、右旁に加筆補入

59ウ　「處ヿ」　もと送り仮名「ヲ」、墨筆を以て訂正

「■■■■■■■

（賛玄第十四）

63オ　「日、月」　両字の間に連続符有り、今、私に削除

63ウ　「不」　本行脱、右旁に加筆補入

「不」　本行脱、右旁に加筆補入

64オ　「■」　もと「植」字有り、墨筆を以て抹消

「也」　本行脱、右旁に加筆

「杏」　底本譌、「杏」字に作るべし

64ウ　「一ヲ」　本行脱、右旁に加筆補入

「■」　もと「以」字、衍、墨で塗抹

（顕徳第十五）

65オ　「識知」　両字の間に読点有り、今、私に削除

65ウ　「導ノ引」　もと「引ノ導」に作る、移行符を以て訂正

「■」　もと「言」、墨筆を以て塗抹

66オ　「輙」　本行脱、右旁に加筆補入

「浅ヲ曰レ掲ト、由レ膝以上ヲ曰レ渉ト」　此の九字本行に無く、眉上に加筆補入

66ウ　「若シ」　もと「如」、右旁に訂正加筆

「若シ」　もと「如」、右旁に訂正加筆

67オ　「曰」　本行脱、右旁に加筆補入

「徐」　もと右旁に振り仮名有り、墨筆を以て抹消

「知ニヲモムルニソ」　もと「如」に作る、右旁に訂正加筆

「徐ハ」　本行脱、右旁に加筆補入

67ウ　「レ到」　本行脱、右旁に加筆補入

「澄ナハ」　本行一字塗抹、右旁に加筆

「混ノ」　本行脱、右旁に加筆補入

「久シ」　送り仮名もと「ヲ」に作る、墨筆を以て訂正

68オ　「夫ノ唯」　本行此の二字脱、右旁に加筆補入

（皈根第十六）

69オ　「■■■■」　もと「意想交侵」四字衍、墨線以て抹消

69ウ　「■」　もと「者」字衍、墨以て抹消

70オ　「言ハ」　本行脱、右旁に加筆補入

70ウ　「■」　もと「不」字衍、墨以て抹消

71オ　「義曰常者」以下の文、もと經文「復命曰常」の注文の次に有り、符簽を以て此処に指示移行さる

「會上賄乃継支之辞」　此八字本行に無く、行間に加筆

（淳風第一七）

73オ　「■■■■■■」　もと「教令也一曰」五字、墨線で抹消

「■■■」　もと「通論曰」の三字、墨線で抹消

73ウ　「其」（ソレ）振り仮名「ソレ」、もと「ソノ」、墨以て訂正

75オ　「禁者禁制也令號令也」（ナリ）（ハ）（ナリ）　此の九字加筆、「禁制」以下七字は眉上に有り

76オ　「及」（スハ）　本行脱、右旁に加筆補入

76ウ　「言」　本行脱、右旁に加筆